女學雜誌

第二百四十六號　明治二十四年一月一日發兌

目錄。

大附錄。

下六番町六番地　女學雜誌社

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 246. JANUARY, 1ST. 1891. 第二百四十六號目次

恭賀新年

中島俊子　清水豊子　荻野吟子　吉田伸子　安藤種子　小島清子　田邊龍子　若松賤子

巖本善治

磯貝由太郎　星野愼之輔　倉長恕　木村祐吉　川合信水

堀口庄三　井上藤平　船橋賢吉　竹中松三　櫻井好德　志津順哉　足立松之助

渡瀬莊三郎

女學雜誌 第二百四十六號 明治二十四年一月一日發兌

社説

歳月短きに非ず

唯だ去歳の一と年の夢の間に過ぎつるのみにあらず、從來の歳月皆風の如くに行きぬ。今年二十の男女は二十年を何の爲めに送り、今年三十の人は、三十年を何の爲に消せる。靜かに思ひ運らすときは前生は、猶ほ夢の如し、後生亦た何如ん、雲より出でゝ雲に隠る、天上の星高く遠く小さく暫らく燦めきて則はち直ちに消ゆるの心地す。

人世寧しろ長しと云はず、日月の過行くは數ふるよりも御速やかなり。左れど、人もし此の間に善を爲さんとを欲せば、善を爲すの餘裕綽々として存す。ゼレミー、テーロルの云く、暴君强賊の思ひを滿さんが爲には、人の生涯は甚はだ短きものあるべし、大ひなる富を貪ぼり、痴然たる愚を滿足し、敵を悉とく服せんと欲するには、世は寧ろ短かゝるべし、左れど、德を養なひ、温柔謹嚴の性を造らんと欲するには、神は十分の餘暇を與へ玉へり、もし朝たに夕べに之を思ふ時は、日月久しく光を垂れて人に其時間あらずと云ふとなしと。願くは人、俗世の事の爲に歳の徒らに過行くを歎ぜず、德の立たざるが爲に深く年月の消行くとを憂ひとすべし。

新年の幼稚園

ソロモン云はく、働らきの時あり、遊びの時ありと。今は即はち遊びの時なるべし。夫れ、歳末は猶ほ晩年の如く、春は猶ほ幼時の曉の如し。

人は元來議論せずして信ぜんとを欲す、只だ疑ひの雲胸間に充ち滿ち、天上の光明其影を隠さんとするによりて初めて議論せざるを得ず、其論ずるや口を角にし、眉を逆立て、激して怒らずと云ふとなし。左れど此は只だ信に達せんとを欲するが爲めのみ。信を得ざる者は、驛路にさまよへる旅人の如し、心安着せざるなり、其の信を揣り求るや、乳のみ子の乳を探るが如し、之を得ずんば叫ぶ。

人の人に對するや初めより和らがんとを欲す、未だ曾て相反むき、相競はんとを欲せざるなり、帝者四方を征服し、卓超として一人衆に秀づると云へども、友なくんば無聊を消すと能はず、風に乘じて宙天に獨りひらめくが如く、高き人の慰

さめ手なきは、天上の沙漠に獨孤の生涯を爲すに均し。左ればば人は唯富を得んとを欲するにあらず、富んで人と共に樂しまんとを欲する也、唯權威を貪ぼらんとするにあらず、權威ありて自由に人の愛を得んとを欲する也。人の本性は快ちよく人と樂しまんとを欲す。

此を以て、幼な子は未だ人と成らずと云ふと雖ども、實は人の中の眞の人なり、其邪氣無くして人を信ずる所ろ、眞の人也、其の疑がわずして樂しむ所ろ、眞の人也、其の貴賤貧富を忘るゝ所ろ、眞の人也、幼な子の交わりは眞の人の交わりを表す、幼な子の戲むれは眞の人の戲むれを表す、語に云く、大賢は兒の如しと、幼な子は即ち眞の大人也。

人長じていよ〳〵邪氣に長じ、日に〳〵眞性を磨消す、朝たに夜半に名利に狂奔して安き心なく、美なる天地に住すと雖ども、宛がら、牢獄に囚わるゝものゝ如し、何ものか夫れ彼等を導びきて其幼なき時に引返すものぞ。

春は實に幼時の曉の如し、新年の樂しみは人をして俄然幼な兒とならしむ、今は遊びの時なり。

子女學校より歸り、父は業務を休み、母は料理の爲めに笑つて忙がわしく、老父老母は孫と戲むるゝによりて世話し。此時に於ては、室中、議論する聲を聞かず、算盤を彈く音を聞かず、滿堂怡々として幼稚園に似たり。春は人をして幼な兒とならしむ、幼な兒は即はち眞の大人也、春は人をして暫らく眞の人に反らしむ、今は遊びの時也、諸君宜しく無邪氣清淨の境に遊悠すべし。

歲暮悲しからず新年更に樂し

中島とし子

開花原是落花の風、毎歲雀鴉聲欣こばしく、梅柳色麗はしく、旭旗門松共に嚴めしく、將來多望の年少が弄ぶ紙鳶の空にうなる、紅緑彩なる手毬の室に響く、一として欣ばしげならざるはなし。然かれどもこのよろこばしげなる現象は、葉落ち、霜降り、山瘠せ、水枯れ、乾坤何となく蕭殺慘澹たるの現象を呈する后の原因なるらめと想ふ時は、春來るとて喜ばしきものに非る如くなれど、悲歡は時々の感情なるを以て、人間生るれば死するの故を以て生るゝをよろこばざる者はあらず、終には悲みに歸するを知るの故を以て、喜ぶべきに喜ばざるは人の常を失するものなり。されば、山瘠せ水枯れ寒風凜烈たるの時節來るの故を以て、花笑ひ鳥歌ひ輕暖人に可なるの新春

をよろこばざるものもまた人の常を失するものなるか、只奈何せん、この一悲一歡の中、緑鬢霜を生ぜしめ、花顏皺を添へしめんとす、徒らに霜を生じ徒らに皺を添ふるのみにして毫も世に對して功益のなかりせば、其最終の日に於て、最も憾多きものあらん。而して今日我が婦人社會を觀れば、日一日より、年一年より、進化しつゝあるを覺ふを以て、一年の最終に逢ふとも聊か憾むところなく、却て新春更に新進化を添へん事のたのしみを有せり。是に於て、婦人の注意せざるべからざるものは、婦人が往事に比して、人物の進み、地位の高まるに隨つて、婦人の非難せらるゝ事亦多く來るを覺悟せざるべからず、其智識の未だ進まざる、地位の未だ高からざる日に於ては、非難すべき事をも非難せざりしは、男姓が婦人を子兒視して容赦すればなり。以後は必ず然からず、而して其注意すべきものは、孰れにあるか。必ず種々あるべけれども、妹の希望する處は、女學校の女學生に對して尤も深く注意を乞ひたきものなり。妹は深く女學校の女學生を敬愛するものあり。女學生の譽れを、吾が身の譽れと齊しく感ずるものなり。女學生の毀りを、吾が身の毀りと齊しく感ずるものなり。女學生自身は、魂潔きを以て、行ひ正しきを以て極安心に、極平氣に擧動ひ玉ふ事に向て、非難を蒙り玉ふ事なきを保すべからざれば、春宵月に歩する如きも、夏晨花を探ぐるが如きも、病に臥するの友を訪ふ如きも、愁に沈むの客を慰むる如きも、猶注意せざるべからず。是を以て、其他注意すべき事の多きを知り玉ふならん、妹は擧げて言はず、筆及ばざればなり。之を略言すれば、今日迄は、婦人が譽らるゝの時代にして、今日以後は暫く非難を受くるの時代たるべし。其譽られし眞に譽められしに非ず、曾て久しく、婦人に學問さすも無効ならん教育するも無駄ならめと想像せし輕侮心より迸り出たる譽言なればなり。最早此譽言の時代も過ぎ去りたれば、必ず非難の時代に遭遇せざるべからずと想ふ、而して、この非難の衝に當るものは、蓋し夫れ女學生にある乎。宜矣、女學生最も注意を要すると。妹は女學生を愛する事の深くして、望を屬する事の重きを以て、新年早々此の如き無躾なる注意を乞ふに至れり。女學生が幾分の日月を經過すると共に、賞譽の時代を過ぎ去り、非難の時代を經過して、遂には光輝ある時代を來らしむると思へば、梭の如く飛び去る歳月何の憾みかある。歳暮悲しからず、新年更に樂し。

言行

○大勝利の人　サー、ジヨン、ルボツク、其「人生樂」の書中に云へらく、世上の眞の大勝利の人は、大將にあらずして、思考の人あり、即はち、成吉汗、アリパー、ラムセス、アレキサンダーにはあらずして、孔子、釋迦、アリストートル、プラト、クライストなり。

○天地の聲音　天地は神の殿にして、四面榮光を顯はす、學んで之を考ふれば、何ものか吾に教ゆる所ろあらざらん。シエクスピア云く、木には舌あり、流るゝ小河に文あり、石に說教あり、万物に善あり。

○知と用と行　孔子家語に曰く、子路孔子に問へらく、賢君國を治むるに、先んずる所ろ何くにかあると、孔子曰く、賢を尊とび、不肖を賤しむにあり。子路曰く、由聞く、晋の中行氏は、賢を尊とび不肖を賤しみたれど、其國の亡びたるは如何ん、孔子曰く、中行氏は賢を尊べども用うるヿ能はず、不肖を賤めども去るヿ能はず、之を以て賢者は己を用ひざるを知つて之を怨み、不肖者は己の賤しまれんヿを知つて讐したりと。」　桓子新論に云く、昔し齊の桓公出て一の故墟を見て問へらく、何人の墟ぞと。或人對へて曰く、郭氏が墟あり。復た問ふ、郭氏は曷爲ぞ墟と爲る、曰く善を善とし、惡を惡とせしが爲めありと。桓公曰く、是れ國を存するの道なり、反つて墟と爲るは何ぞや、曰く、善を善とすれども用ゆる能はず、惡を惡とすれども去るヿ能はず、此を以て亡びたりと。」綱鑑易知錄に之を補ふ、云く、桓公歸つて之を管仲に語る、管仲曰く、君亦た郭公のみと。（蓋し、或人の言を善しとして之を用ひざりしがゆへ也）。知と、用と、行との差別如此し。

○物事極意の覺悟　もみぢ

塚原卜傳が高弟子何某、或時、癖の惡しき馬の后へを通行しけるに、馬突然之れを蹴りぬ。何某飛鳥の如く身を交はし、之れを避けたれば、見る人喝采して賞賛一と方ならず、同門の弟子皆な之を己が事の樣に思ひ、肩を廣くして先生に注進し、さま〴〵に吹聽す。卜傳つく〴〵と聞て、扨ても好きヿを爲しぬ、怪我なくして先づ重疊なり、扨て我等にも一つ試み

よと連りに言ふものあれば、行て見るべしとて出で行く。門弟は、一層騷ぎ立ち、大先生の働らきは、倚更の事あるべしいで拜見せではと、皆打連れ、遙か後ろより樣子如何にと窺がふ。卜傳靜かに馬の邊りに來り、其后りへの方、二三間離れて遠まわりに迴り、恐る〳〵用心して、そと通行し、家に歸りぬ。門弟に謂て云く、諸君如何にか見玉ふ、用心して通る時は如此し、暴馬たるとを思はず、其傍らに接近して跳ねらるゝは、たとひ傷せずと云へども、既に武士の不覺悟にあらずや、未だ蹴らざるに之を避け、全く之をして蹴らしめざるの最とも安全あるに如かずと。

又或る水練の達人にて、昔し德川の頃ろ、水練の稽古に師範たりし何某の語るを聞くに、水およぎの上手とは、成べく躰を多く水の上に出すにありと云ふ。左れば其の何某が水に入る樣を見れば、乳下より上悉とく現われて、宛がら水中を歩むが如し、足は下に働らくらん、表てには何の苦もなき如くに見へたりける。其人の言へるやう、水練の覺悟如此し、左れば、尤能く泳ぐとは、水に入らず、陸の上に居て土の上を歩むの時を言ふ、成べく水に入らざるが水泳ぎの極意也と。

雜錄

女子德を脩むる心得

松村介石

第三種　脩德を力むる人（下）

人若し此第三種に至らんか。乃ち法律規則の上に出づ。それ法律規則は罪惡を懲し義務を命ずるに在り。然れども既に彼れが罪惡を犯さず。義務を懈らざるゆえんのものは。法律を畏るゝがゆえに非ず。規則に掣かるゝゆえにもあらず。只だそれ彼が本具より。善を愛し義を慕に起る。然則。法則の有無彼に於て何かあらんや。一々母の訓戒に會ずとも。朝々敎師の講話を耳にせずとも。吾れ先づ進んで。斥惡施善の任に當る。又何ぞ他動的の命を待て。而して始て動くとをやせん。

蓋し德育の行はれ難きは。是非曲直の不分明なるが爲めに非ず。非に克ち道に復す難ければなり。非に克ち道に復す。何故に難きや。悔改の決心薄ければなり。人往て說敎を聽く。聽くところ。必ずしも斬新の說に非ず。每度聽くところ畧ぼ相同じ。而して善惡畫如たり。然れども聽く人曾て高尚に化

せず。何故ぞ。曰く。脩徳の決意乏しければなり。所謂る第二種類の人なればなり。演劇を觀て。暗噁泣噎。肩を怒し、悪物を詈り。涙を呑んで孝子を哀れむ。然れども觀るもの。曾て德に進まず。否。甚しきに至つては。己れ不孝の子たりながら。切りと不孝の子を惡み。己れ惡物たりながら。切りと惡物を是れ詈り。而して依然。己が不孝己が惡業を止めざるものあり。何故ぞや。曰く。內に反省の心なければなり。或は一時感發して轉た我身に反るともあらん。然れども其はたゞ一時の感情にして意力之に加はらざれば。水上の泡沫と一般。須臾にして消へ去るを例とす。

茲に笑ふべき一話あり。或男。或日不圖したるとより。己が平生の怠慢を悔ひ。一夕其友に請ふて曰く。君は有名なる早起の人なり。願はくば明朝我を起せ。余若し起きずんば。衾を剝げ。剝で猶ほ起きずんば。擊つとも怨みずと。其友諾す。於此乎。翌朝拂曉に起き出でつゝ。約を踐んで彼を起すに。彼れ方に鼾睡。更らに覺めず。之を搖ると數度。彼れ稍々應ず。因て去る。然れど彼れ畢に起きず。朝陽赫々紙窓已に彰かになりて後。彼れ倉皇として跳り起き。乃ち去て。友人を捉へ。張膽怒髮。詰て曰く。君何すれぞ約に背くや。友人告ぐるに實を以てし。且つ曰く。余衾を剝がんと欲したれども。忍びざりし。彼れ曰く。何ぞ厭はん。願くは明朝再び試みよ。余れ若し猶ほも起きずんば。則ち遠慮なく衾を剝げ。蓋し是余が爲めなればなりと。友人止むを得ずして諾す。於此乎。翌朝又復彼を起すに。彼れまた前朝に異ならず。因て再三再四搖り起して后。遂に卒然衾を剝ぎしに。彼れ勃然として起き上るや。否や。瞋目切齒。友人を目掛て逐ひかけ來り。汝。不禮。何物ぞと。大音聲に呼はりながら。矢庭に友人を攫捉へ。忽ち椽前へぞ擲き飛しける。

嗚呼此れは是れ何事ぞ。曰く。彼れは一度反省したり。又悔改を志ざしたり。然れども決意の未だ堅からざるが故に。かゝる不都合を仕出かしたるなり。若夫れ決意堅からんか。何すれぞ人に賴らん。既に人に賴て改めんと欲す。宜べなる哉。其結果の茲に至るや。

然則知るべきなり。脩徳の發心は入道の門にして。悔改の決意は即ち進徳の基たることを。蓋し說敎者の勉むるところも。敎育者の志ざすところも。即はち亦た此の根本に於てせざる

べからずと信ず。然るに余れ世の敎會を觀るに。儀文儀式の齪齪たるあり。信仰個條のむつかしきあり。說敎の華靡なるあり。小言の紛々たるあり。然れども畢竟するところ。所謂る支離滅裂の法を講じて。而して拔本塞源の術を忘るゝものゝ如し。徒づらに他動注入的を是れ勉めて。而して自力自動的を怠たるものゝ如し。若夫れ學校に在て之を云はんか。猥りに法則を繁くし。警戒を夥くし。曰く是れ女子の道なり。曰く是れ。文明國の女風なり。曰く。是れ本邦固有の女德なり。曰く。之を爲せ。曰く。之を爲す勿れと。而して嚴達以て生徒に臨む。是以。生徒は徒其嚴達を守るを以て輙ち女道を脩むものと心得。敎師は之を見て以て得意たり。是れ固より惡きにあらず。規則必ず無らざるべからず。美風必ず敎えざるべからず。然れども是れ末のみ。若夫れ敎へて以て始て善惡を取捨せしむものとせば。百善百惡皆之れを敎へざるべからず。若夫れ規則に依つて以て道を守らば規則なきところに至て則ち廢す。事々物々を世話燒て而して始て之を行はしむ。是れ小兒を御する術のみ。規則を制して以て始て之を動かす。是れ機械を取り扱ふ法のみ。是れ豈理性ある學生子弟を養成薫冶するの道ならんや。此等を是れ小言婆々的學校と謂ふ。小言婆豈德育の良師ならんや。

然則如何にせば可ならん。曰く。事物を敎ゆる前に當りて。先づ其主義を敎ゆるに在り。道德を敎ゆる前に當りて先づ。其脩德の決意を堅立せしむるに在り。其主義已に明らかに。脩德の決意已に立つ矣。則區々の敎戒を待たず。法規の有無に拘はらず。自警。自動。自脩。自力。自ら道德を守るに至る。即ち事に臨み變に應じ。已が滿腔熱願の主義を行ふに至る。乃ち聖書を讀んで始て之を行ふに非ず。論語を聽て始て之を行ふに非ず。母に言はれ。敎師に說れて始て之を行ふに非ず。上。天を戴き。下。本良に質し。神智靈覺。自から斥惡行善の途に向ふ。是れ機密なり知らざる可らず。既に守錢奴の非なるを知る。豈遠人を疎んぜんや。既に庭前の惡草を拔く。豈塵埃を室中に積まんや。既に塵埃を室中に積まず。豈庖厨に汚物を遺さん。既に此等を悔ゆるを知る。何ぞ其他を悔ゆるを忘れん。且つ夫れ既に家に在て孝子たり。豈學校に入て惡生たらんや。既に學校に在て良生たり。豈人に嫁して良妻たらざらんや。それ既に良妻たり。又必ず良母たるべし。既

に良母たり。豈又良友たらざらんや。源頭既に清まれり矣。百流乃ち珠光を帯ぶ。脩德の決意既に立つ矣。百德乃ち自ら至る。之を第三種の人物と云ふ。

女學雜誌の新年　　　鈴　木　弘　恭

家刀自とみゆるばかりにねびまさり
年をむかふるふみのめでたさ

初　夢

田邊花圃女史

粗末にうるしぬりたる机ならべて、年十四五歳なるべしとみゆる女の童、蝶々髷などに結て、可愛らしきが三十八計居ならびて、物讀書すべを學べるさまなり。いづくかしらねど、我祖母などの物語り給ひし寺子屋てふもの丶如く、師と覺しき四十餘の婦人、女今川大學など表紙つきたる本をしふるさま藹然として恩愛あふる丶は、慈母の我子におけるも及じとおもふほどにて、女の童等又靜粛として敎に從ふさま、いとなつかし。今日は三日なりといひて、おの／＼おのれの机をとりかたづけ、師に一禮して連立かへる。手に下げし草紙の表をみれば、天保三年正月吉日などしるしありぬ。この時後の方騒がしく、かの寺子屋は、高樓大廈の西洋造りとかはりて長ぎ板の腰掛により、机樣のもの前におきて、束髪にゆひ、或は洋服よそほひ、又た書生羽織に沓うがちし十四五の女生徒等を前に並べ、二十五六の女敎師、黒き板に白墨もて何かかきつけたるが、遙かに聞ゆる鐘の音をあいづに、時至りぬと引退く。滿塲の生徒とつかは立て歸らんとする、其塲の騒動ガタピシといふ中に、甲「チー一藤さん、家のおつかさんのいふ事は、ほんとに不條理じやアありませんか、クリスマスに福引をすると、似高さんの所からいつてくれば、くれから遊ぶもんぢやアないつて、男の人や何かと入交ざつてそんなとをしてはいけないッて、だから、卑屈に斗落てしやうがない、今先生のおつしやつたやうに、從順と卑屈と間違がへてゐるのだもの　一藤「さうですともどうで昔の人は相手にならないのヨ、そうかつかぢめて壓制されてたまるものかだワ、撒奈須さんかまわないから、クリスマスに似高さんの所へ入らつしやいヨ、あたしがさそひませう、チチ。撒「さうぢやアいかうか。一「入らつしやいヨ、きつとチと、いふを聞て、我父西洋にても、年若き娘は父母の許なくては、人と交際せしめざる風習ありといひ給ひしものを、いで先にみつ

るさしきや女の童等の事どもものがたり、この二人をとどめてんと、手をのべてさし招かんとする時、フト物におどろかされし心地して、われは兩親の側に、昨夜のごとくありぬ。」嗚呼婦女の教育は道德の源、治平の基なりとさまぐ〜心を盡し玉ふ人も多かれど、いまだその方針に至りては、今猶世人の問題として、論ずる所なり、或一部分は、極端に走り、或一部分は五里霧中に彷徨して、歸する所を知らざるを如何せん。願はくは此二十四年間には女子社會に○閫などてふ魔風おそふとなく、猶日にく〜進みもて行て、完全の教育を施し、無垢清淨の女德ある淑女閨秀を出さん事をと手を取りしばりて、思つゞくるを、猶痴人の夢を說たぐひと人のみ玉ふやいかに。

感二つ　　まさを

十二月晦日

始あらざるなし、よく終あるは少し、とは詩の卷に見ゆることばあるが、實に今年よりはと思ひ定めしことども、いつか忘れやるぞ、うたてきことにこそ。されば終を始に愼みて萬事をなすぞ肝要なれ。或町人年々正月二日の書初に十二月晦日と大字に書て、之を家の大黒柱に張置て、主人常々の心の鵠となせりとぞ、よく愼める人といふべし。

閑通和尚坐右の銘

人此世に客に來ると思へば、世話も苦勞もなし、心にかなはざる食に向ふても馳走と思ひほめて喰はねばならず、夏の暑も客あればこらへねばならず、冬の寒も客あればたしなまねばならず、孫子兄弟猶以て相客なれば挨拶よくくらし、跡に心を殘さずいとま申するまで、

父母に呼れてかりに客に來て心殘さず歸る故鄉。

亞米利加に於ける日本婦人

仁戸邊(元太田)稻造君近ごろ著はす所の「米合衆國及日本」と題する新書の中に、亞米利加に於ける日本婦人の事を記せり、大畧を譯して左に揭ぐ、

最初に亞米利加に渡りたる日本の女學生は、今を距る廿一年以前、即はち明治三年の頃ろ、時の開拓使長官黑田淸隆氏の命を蒙むり、デ、ロング夫人の案内にて五人の令孃渡米したるとにてあり。其名は吉松(十五才)上田(十五才)山川(十二才)

永井(十歳)津田(八歳)と云へり。彼等が米國に到着するや、到る處ろより之を招き、皆々わが校にて敎育せんと申出るもの頗ぶる多かりしが、遂にランマン氏夫婦の監督の下に、ゼヲヂトウンにて敎育さるゝこととなり、中にも津田梅子孃は同氏方の家族に入り、十年間を經て歸朝する迄で氏が家にのみ在りぬ。他の二人は故ありて后ち暫らくして歸國し、山川、永井の二人はバッサル女大學に入り、中にも山川孃は、非常の名譽をもて卒業しぬ。現今、津田孃を除く外皆な婚姻せり(山川孃は大山大臣の夫人となり、永井孃は瓜生海軍大尉の夫人となりぬ)。津田孃は現今再たび渡米し、目下、ブリン、モウル、女大學に留學あり。

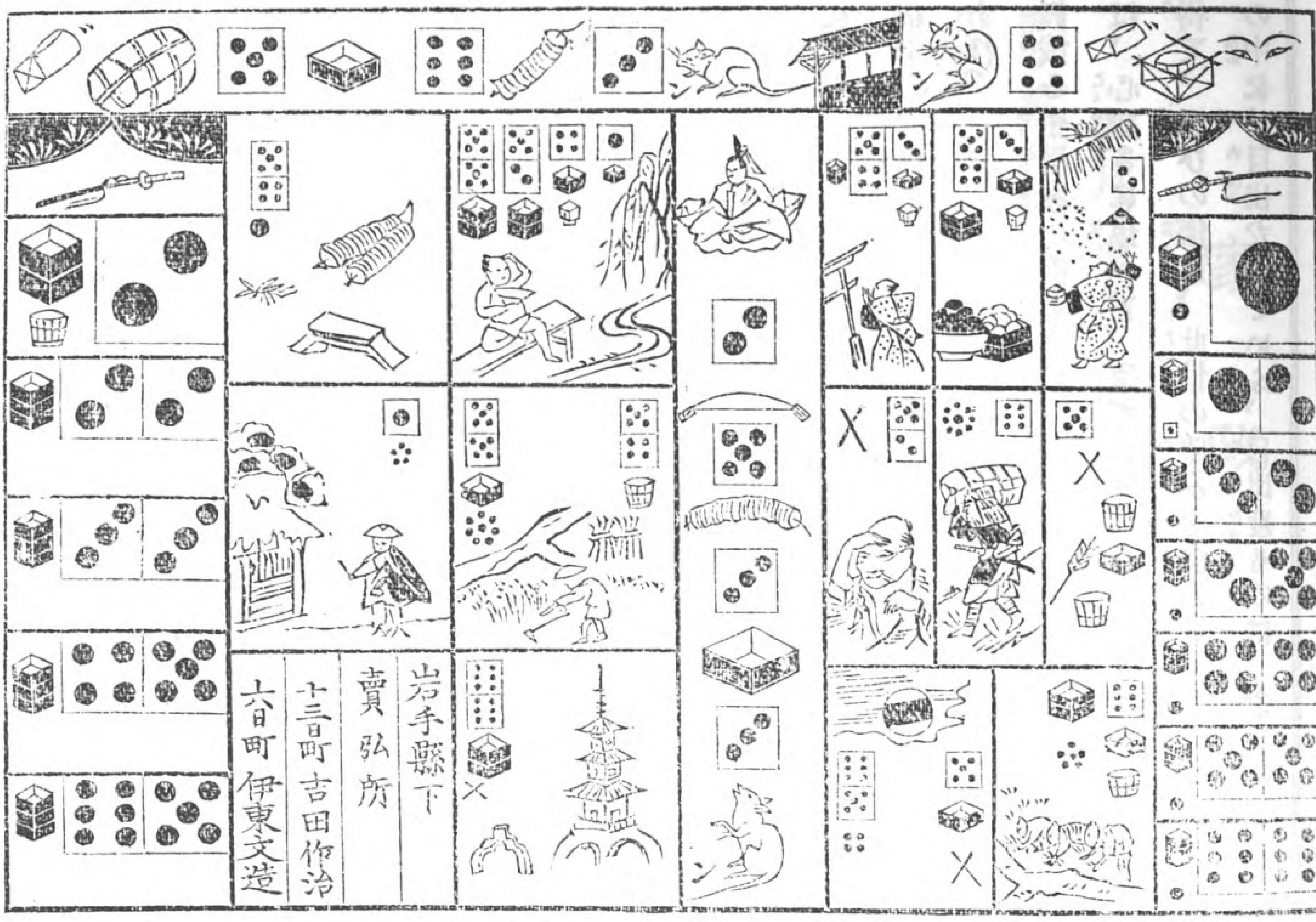
六年前、日本政府は、文部省監督の下に、加藤錦孃をマッサチウセッツ州のサレムに遣はし、又た近頃ろ、幸田のぶ孃をボストンの音樂學校に遣はしぬ。

其他菱川やえ孃はチカゴにて、岡見けい夫人はフヒラデルフヒアにて共に醫學を學び、岡見夫人は歸朝の后ち、目下東京慈惠醫院の婦人部を監督す。又ウエストミニスターの西マリーランド女大學にては平田つね孃、マウント、ホリヨークにては、宮川ギウりき孃留學す。曩に田村夫人は、牧師の妻たる生涯實習の爲めニウヨークに來り、園孃はカリフホーニアのパシフヒック大學にて法律を學び、歸朝の后ち代言の業を執らんとす。其外、ワシントン、チヤムパースパーグ、チバーブルック、サンフランシスコ、ヲークランド等にて數人の女學生現に留學中なり、云云。

おほそらは梅のにほひにかすみつゝ
曇りもはてぬ春の夜の月

○繪ごよみ

暦は欽明天皇の御代、百濟より渡たりたるを初めとし、其后しばしば、色々の變化ありしが、明治五年に至り、斷然太陽暦と云ふ今用ゆるものに改めたれど、片田舍にては尙ほ昔しの太陰暦を用ゆる所ろ多く、之が爲め正月を二度びする奇談なきにしもあらず。夫のみならず、更に田舍に至れば、繪でよみと云ふものあり、繪にて暦を作り、文字なくして能く通用するなり、今ま其一つを寫して左にかゝぐ。



笑ひ草

万年の亀

さよ子

四季をり〳〵の移り替りよりも、殊に目立てをかしく見ゆるは、去歳と今年の、移りめにぞある。きのふまでは、左して、優にやさしと思はざりし山の姿も、清く澄めりと思はざりし川の流れも、今日は何となく、其趣をあらためて、見る我さへに、生まれ替はりたるが如き心地せらる。雑煮餅祝はふ人々の顔を見渡たせば、昨夕までも、雪におされし枯草のごとく、凋ぼみ切つたる老婆も、今日は幾十年の昔し思ひ出でらるゝがごとく、額の皺を延ばして、若かやぎたるもをかし。忙がしき中に邪魔のみして、昨日は一日、あらずもがなと思はれたる子供も、今日は温和しく小いさき膝に手を置きて、お目出たうと述ぶるもしほらし。膨れたるおさんの頬にはそら豆ほどの笑靨を點し、手飼の洋犬は心ありげに、主人の傍に座を占めて、首を擡げたるも妙なり。垣根の草はまだ萌へねど、鉢植の松は、小さきながらに、千歳の色を示す

に似たり。椽側の福壽草は、初日影に向つて、心地よげに首を上げ、隣家の庭に羽根つく音は、老人の耳にも、面白く聞へて、けし坊主の昔を憶はしむ。かくの如く見るもの、聞くものとして、樂しく、笑ましからぬはあき日なれば、老も若きもをしなべて、千代も八千代も生延びつ、いつまでも、この嬉敷春に逢ましとの念を、起すは實に無理ならぬ事なりかし。去れど人よ、能く思せ、皮もて覆ひ、肉もて滿たしたる身躰は、いつかは終ひに、衰へねばならず、秦の始皇は、蓬萊に行きて、不老不死の藥を求めしめしかど、終に得ずして、死失せにき、去れば果敢なき肉を頼みに此の世に生きながらえんとするも、百年の壽を保つは誠に稀なれば、心ある者は、只に徒らなる命を延べんことを願はずて、長久に盡きざる靈の救いを得、此世の外に誠の生命を保つこそ、實に賢き業になんあれ。

爰に或る金滿家の翁ありけるが、老の餘命みじかき事を思ひては、心細さに堪へず、爭で百年二百年も、生き延びる工夫を得て、思ひの儘に、此世の望みを滿たさばやと願ひ、凡そ世の中に、目出たしといふ、目出度ものは、金を惜まで、買ひ調へぬ。此事を出入の魚屋聞付けて、或る日の事一頭の龜を持來りていひける樣、此龜こそは万年は必ず生き延びるといふ、緑毛龜にて候が、今日圖らずも手に入りたれば、一應御隱居樣の御目にかけ候、御望みならば如何程にか御讓り申上んといふ。翁大に喜びて之れを二百金にて買受け池に放ちて朝夕見て樂しみけるが、彼龜は元來、糸もて其尾を拵らへ、緑色に染なし、緑毛龜と見せ掛けたるものにて其の實尋常の龜に外ならねば、いく程もなく、死に失せぬ。翁痛くうち腹立ち、憎き魚屋め、能くも此翁を欺きて、二百金を掠め取りしよと、急ぎ彼魚屋を呼寄せて、嚴敷談じ付けたるに、彼魚屋は、誠に不思議ある事にて候、万年經ぬ内に死ぬ筈はなき龜なるにと、暫し小首傾けて、ありけるがやがて膝を打ちて、「ハヽア御隱居樣分り升た、彼龜は大方、今年で恰ど、万年目に、當つたので御座り升う。



家政

正月、理想上の料理

小島清子

初號の家政の欄に何ぞ理屈を物せよと社よりの嚴しき命令もだし難く、筆は採りしもの、新年早々理屈もあまり妙ならねば、あれやこれ、これやあれといろ〳〵考へ見たれど一も意に適はず、さればいつそお正月の御馳走をありとも、敬愛する讀者諸君と共に試みば、さぞ好味しくも亦樂しからめと、先づ其献立のあらましを左に、

汁、吸物、

○たいらげ、よめ菜、○塩鳥、丸むきうど○もうを、けし葉、木の子○へぎ鮑、ふき、しやうろ○鱈、茶せん葱、ふぐもどき○雁、むすび芹、つぶ椎茸○白魚、青海苔、味噌又は清汁梅の花玉子吸口梅花○○がん、さん椒の粉○玉子、岩茸、薬味胡椒○鶴、葉つき大根、しめじ、皮牛房○たこ、葉つき葱、からし○實くるみ、みる○松露、ぶん豆もやし○きん子、漬松茸、こせう○かしわ、牛房さゝがき、すりせうが○白魚、岩茸○小花ゑび、木くらげ、ゆの皮○かき、せり○すり身、つぶ椎茸、小まな○鯛白やき小串かいわり菜、○蝦すり身天ぷら、きくらげ、たゝき菜○

以上赤味噌白味噌或は清汁等適宜に應用すべし。

鱠　刺身

○鯛、せん玉子、大根、くり、せうが○きすご、なまこ、大根、せうが、栗、きん柑○白魚、うど、岩茸○鯛糸づくり、はり大根、赤貝、きくらげ、芹、二はい酢○鰡ひら作り、岩茸、芽たで、酢味噌○鮑糸作り、蓮、いも、梅そうめん、わり銀杏、きくらげ、たれ味噌○きんこ酢芹、大根、岩茸せうが○塩引さけ、銀杏、かう茸、酢味噌或は二はい酢○鯛、かつを角切わさび醤油○鯛糸作、赤貝、酢積○鰡ひら作り岩茸、芽たで、○鴨、山うど、針栗、酢味噌○鮑、海そうめん、きくらげ、○なまこ、きすご、二はいず○烏賊、貝の柱

以上の種物にて酢味噌二、三、ばい酢、わさび醤油等何れにも用ゆべし。

羮物　平、大平全し

○蠟燒鯛切身を玉子にて付燒す大椎茸、くわん草○鮑のぶすま位立、きくらげ、三ッ葉○きん子、ぎんなん、長いも、鴨、三ッ葉○そろりこ、むし栗、三ッ葉○しんじやう、岩たけ、蓮、いも

○くずな（くずの紛を身にたゝき込むなり）なめ茸、青まめ、鴨天ぷら、芹白根○きんこくわん草、うす葛○押玉子、岩茸、せり茎許○蠣玉子にてよせる椎茸、ゆり根○白魚、岩茸、ぎんなん○鴨たゝき、ちやうろぎ、うす葛○きざみ竹の子、むすび鰕、椎茸、此外たゝき鳥すり身等に野菜を程よく遇らへば餘計の費用を掛けずして許多の來客を饗應するを得べし。

和會物

○生貝、うど、岩茸、○たいらぎ、岩茸○赤貝、ちやうろぎ○たこ、きくらげ○さゝい、うど○いせゑび、岩茸、にぬき玉子○烏賊、かうたけ○車鰕、めうがたけ○むきしゞみ、木くらげ○つくしゝし、かうたけ○實くるみ、かうたけ。

以上白あへ、黒あへ、梅噌味あへ、青あへ、葱噌味あへ、木の芽味噌等適宜應用の事。

調理方

○のぶすまはあはびを薄くつくりて湯煮すべし、袋になる故中へ魚類切身又は小鳥たゝきたるを入れ、だし程よく加減し煮る。但し玉子のをぼろ上おきにすれば更に美し。

○青あへは菜又は茶にて青みを付るなり、山椒からし見合、

○梅花玉子は玉子の白身ばかりを茶せんにてふりたて、汁加減して沸へ立ちたる處へ入れて出すこと。

○むしぐりはかち栗を一日水にひたし、よく湯煮すれば生栗の如くなる。

時節物　鳥　魚　菜

鳥　つる、がん、かも、うづら、鳩、すゞめ、ひよ鳥、すくみ、かしは、ひしくひ、あひる、しぎ、雉子、山鳥。

魚　うるめ、かます、たら、さより、きすご、ぼら、ぶり、あんこう、ふあ、いとより、あま鯛、なまこ、さゞい、くじら、さめ、鯛、銀ひしこ、かき、貝のはしら、烏賊、たこ、鯉、白魚、

菜　ふき、うど、なづな、ちさ、かぶら、よめ菜、ほうれん草、三ッ葉、ふきのとう、すぎな、わか牛房、つくしゝ、うこぎ、たんぽゝ、くわん草、水くわへ、松露、きの芽、鶯菜、みかん、芹、防風、ぎんなん、ねぶか、きん柑、かぶら大根、わさび、蓮、人參、いも。

四方の姉妹よ希はくは卿等の眞心を込られたる調理は世の浮薄なる料理店の仕出しと異なり、無量の香味の其中に籠れるを深く思ひ、須らく其勞を取り給ふべし、自らにも慰さめなるのみか卿等の温情を味ふ人々の心中如何許ぞ。況して經濟の極意は是等の些事に存するをや。

兒籃

天國へ郵便

小島清子

世の中に小供程無邪氣な可愛き者はありません其性質の立派なる事天の使の樣です、なぜ小供はこんなに立派でしやうか小供は自然に近いからです自然は實に立派なる者で野も山もだれも手入をしないでも實に麗しくなつております、あなたがたの心も自然のまゝだから美しいのです心が美しいから其顔が愛らしく見へますどんな奸惡な人でもあなたがたの笑顔を見れば心の奸惡はなくなります情の温い詩人はあなたがたを譽めて詩に謠ひ歌に作ります。今小供の立派な事に付て一つのお話を致しませう。茲に一人の神を信ずる小供がありました其小供は日頃母さんより敎へられて神樣に祈りを致しました而して神樣は悲しい時や苦しい時はいつでも救つて慰さめて下さる事を深く信じて丁度人に物を頼むやうに神樣に御話を致しましたから常に喜びに充たされて其可愛らしき事實に例へやうのない程でした或時此小供の母さんが病氣になりましたが日々に弱りゆきて今は頼み少なく見へし時母親は小供に申しますには私は最早あなたと一處に居る事は出來ない……けれども神樣は決してお前をお捨てなさらないから私のない后は何でも神樣にお頼みなさいと遺言して或る日のたそがれ安らかに永き眠りに就きました。小供の心はどんなでしたろう乎いくら泣ても仕方がない親一人子一人なれば誰も世話してくれる親類もなく遂にほんとふの孤兒になりました此時小供は如何致しましたか此悲みの中にも決して神樣を忘れず屹度神樣がどうかして下さる事と信じ殊勝にも天國へ手紙を出さうと決心いたしました日頃習ひ覺へたいろはにて葉書を認め郵便箱に入れんとて參りましたが箱の丈が高くいくら足をつまだて手を延しても屆きませんから大層困て立ております内に一人の牧師が通りかゝりまして其手紙を入れて上げやうと見てびつくりいたしました……なぜ？嗚呼此手紙は天國にあてた郵便でしたから……牧師は急に其小供を抱き上げて親切に其家を訪れ萬事引受けて世話を致しましたそれゆへ此小供は假令母はなくとも誠に幸福なる月日のもとに成長する事が出來ました。私は皆さんがどうぞ此小供の樣な立派な信仰をお持なさる事を願ひます。

批評

○日本政黨公論

大井ゆき女史の著なりと云ふ。保守黨中正派、立憲自由黨、立憲改進黨、舊帝政黨の四つを公けに論評し、終りに、政黨の縁因、並びに政府と國會との關係を辨じぬ。左して目立ちたる議論はあらねど、保守中正派の事を論ずる一章は、中に就て尤とも見るべきものなるべし、文章雄勁、婦女子の筆と思はれざる節々多し。或人之を男子の文章なりと云ふものあり、固より左ることのあるべき筈なし。

○活世界

年迫り、世忙はしき時「活世界」初號、爆然として轟ろき出でぬ。紫山、斗南、天眼三子が編輯する所ろにして、三子は既に、慷慨、才秀、氣鋭を以て世に名ある人なりとす。龍蛇氣、潮、月露、玉淵、寸鐵、奔湍、鶴唳の諸欄を歷觀するに、一條の光彩全面を貫ぬき、斷えて柔劣懸曲の氣なし、現今、世は唐代の末期に似、人は平安の若殿原に均しからんとす、此時に當りて此種の新雜誌を獲、喜び何ぞ堪えん。

文學

氷

池袋清風大人批（東京案山子の屋社中）

〽故郷のこし路のゆきやいかならん硯の海も氷るけさかな

寒月

〽小夜千鳥なく聲さむきなに波江の蘆間に氷る月のかげかな

寒草

〽波の上の月の光も消えそめて霜におけ行まのゝかや原

〽冬かれし澤のあし原立つ鴫の羽風に霜のみだれけるかな

方丈記

鴨長明

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやどりを結べることあり。いはゞ狩人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶のまゆを營むがごとし。これを中ごろのすみかになずらふれば、また百分が一にだにも及ばず。とかくいふ程に、齢は年々にかたぶき、住家はをり〳〵にせばし。その家のありさま尋常にも似ず、廣さは僅に方丈、高さは七尺が内なり。所をおもひ定めざるが故に、地をしめて造らず。土居を組み、うちおほひを葺きて、つぎめごとに、かけがねをかけたり。もし心に

かなはぬことあらば、安く外に移さんがためなり。その改め造る時、いくばくのわづらひかある。積むところわづかに二兩なり。車の力をむくゆる外は、更に他の用途いらず。

その處のさまをいはゞ、南に筧あり。岩を疊みて水をためたり。林軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡をうづめり。谷しげゝれど、西は晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は藤波を見る、紫雲の如くにして西のかたに匂ふ。夏は時鳥をきく、かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋はひぐらしの聲耳に充てり、うつせみ、の世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪を憐む、つもりきゆるさま、罪障に譬へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに妨ぐる人もなく、また耻づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業をおさめつべし。必ず禁戒をまもるとしもなけれども、境界なければ何につけてか破らん。もし跡の白波に身をよする朝には、岡の屋に行きこふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ。もし桂の風、葉をならす夕には、潯陽の江をおもひやりて、源都督のながれをならふ。もしあまりの興あれば、しば〳〵松のひゞきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悦ばしめんとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

それ三界は、たゞ心一つなり。心もし安からずば、牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望なし。今さびしき住居、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でゝは、乞食となれることをはづといへども、かへりてここに居る時は、他の俗塵に著することをあはれぶ。もし人このいへることを疑はゞ、魚鳥のありさまを見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざればその心ろを知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざればその心ろをしらず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずして誰か悟らん。

そも〳〵一期の月影傾きて餘算山の端に近し。忽に三途の闇にむかはん時、何のわざをかかこたんとする。佛の人を敎へ給ふおもむきは、ことにふれて執心なかれとなり。今草の庵を愛するも科とす、閑寂に著するも障なるべし。いかゞ用なき樂をのべて、空しくあたら時を過さん。

理學

吉田伸子

○便利なる懐爐及び暖室爐

醋酸ソヂウムと云ふ結晶躰の、少しく水を含めるものを熱しますれば、熔融て液躰となります。之を其儘置きますと、冷るに隨て再び結晶しますが、其際に潛熱を放ちますので、一時に悉く固躰とならずして、少しづゝ結晶して參ります。從て少しづゝ潛熱を放ちます。(潛熱とは固躰が液躰となり、又は液躰が氣躰となる際に吸收される熱にて、寒暖計には感じませぬが、氣躰が液躰となり、又は液躰が固躰となる際には、再び現はれるものです)。此故に、此醋酸ソヂウムを熔融して、タンポに入れますれば、適宜の温度を非常に永く保つて居る事の出來る懐爐となります。又之れを大なる箱等に入れ、室内に置きますれば、最良の暖室爐の用をなします。

○牛肉と馬肉とを識別する法

牛肉と馬肉とは、第一色に相違あり、又臭も違ひ、味も異なるのみならず、牛の肉は板に投げつくれば跳ね返るも、馬肉は跳ね返らぬなど、色々兩者を判別する點もありますが、此等は人々の感覺ですることですから、確實とは申されません。最も確かに牛馬の肉を判別するには、其肉の中にある脂肪の熔融る温度を試驗するが一番よいと申します、乃ち牛の脂肪は百十度で漸く熔融ますが、夫れでもまだ透明にはなりませぬ。馬の脂肪は六十度で熔融て、七十度で透明になります。ソレですから、其肉の脂肪を取り、其熔融る温度を見さへすれば、牛か馬かは直に、しかも確かにわかります。此法は五年前に、英國の化學家ゼームス、ベルと云ふ人が發明したのであります。

○高山の頂にては玉子煠らず

水は通常の氣壓にては、攝氏寒暖計の百度で沸騰するものなれど、氣壓の強い時は、百度以上ならでは沸騰せず、弱い時は、百度以下で沸騰します。高山の頂の樣に、海面より高さ何万尺と云ふ程聳たる所は、空氣が稀薄で、隨て壓力も弱いゆへ、水の温度が百度に上らぬ前に沸騰を始めまして、時としては其沸湯の温度が、玉子などの蛋白質を凝固に足ぬことがあります。之れに反して、ご飯を炊ぐ時至極重い蓋をして、蒸氣を漏らさぬ樣にしますれば、釜の中の壓力が強くなり、隨て水の温度が高まります故、良いご飯が出來ます。

隨感

○今年の天機豫報　倉長櫻水

設し、予輩に向て、今年の天機如何、吾子夫之を豫言することを得るか。と詰るものあらば、予輩は茲に天通眼を傭ひ來て、之に應じて言はんとす、今年は是矯風大に起る年ならんと。

昨年迄は、社會の傾向、單に政治の一方面にのみあり、世上の事は、萬事萬端、一に政治に依りて、出來得るものと心得、國會さへ立てば、田地は作り取り、借金は德政となりて拂はずもよし、剩さへ働く事が嫌で、貧乏するものぞも、助る法案が出て、所謂寢て居て牡丹餅の旨ひ世の中となるならんと思ひし商人百姓少なからざりき。彼等は今漸く目が醒て、是では國會も左程有難いものではない、議員も何に賴に足ん、サア今度は何か外の救世主が出て來ずば迚も助る瀬はないと呟き出し。又一生懸命に骨を折り、出してさへやれば、後で何樣にかと當にせし壯士連は、今となり、其親分達の薄情を憤り、狡兎竭きて獵狗烹るの嘆聲を放て、空しく下宿屋の二階に、慷慨の腕を張の曉となり、是では馬鹿〳〵しい、今度は却て彼等を攻擊せねばあらぬ、前門虎を防て後門は狼の進を知ざるは何ぞや、今度は一つ、彼等の心術より直して行かねば、迚も吾黨が理想の世の中は六ケ敷と勘辨を仕變へかくて今年は頓と天機がかわりて、矯風の勢力烈くなり、何でも蚊でも矯風で、洗盡さなければならぬ、と云ふ議論が盛に起ると豫言することを得べし。

シテ其矯風の問屋はと云はゞ婦人方なり。婦人は矯風の主動力也、昨年は政社加入の事に付、婦人傍聽の事に付、隨分婦人方の奮發ありしが、矯風の事たる更に之に優り、專ら婦人の天職とすべき者なれば、昨年に倍して奮發を要す。予輩眼を拭ふて、今年の天機を窺ふに、慥に矯風、天の一方より、吹出すことゝ思るゝ也。よりて預かじめ、世の女性諸君に告げ參らす。

○賤機山の上に於ての感を寫す　川合信水

昨年の六月なりける、吾は少しの用事ありて靜岡に至りぬ、二十九日日曜、公園地を散歩して、賤機山の頂に上りたり、清らかなる風は袂を吹き、裳を捲て、羽化飄々の思あり、見れば、富士川の鐵橋、昨日滊車にて渡りたる、其客は今此山頂にあり、眺れば、靜岡の市街、今朝共に語りたる、彼の姉妹の家は何れの處ぞ、彼れは今ま何をかなし居るか、彼れの容貌、風采、言語は、歴々として吾心の中にあり、甲州の地、富士山高く峙つ邊、我家の父弟妹今は如何になし居るか、吾母の逝給ま

ひしより、家の不手廻りなる爲め、父上は如何に心を苦しめ給ふとはなきや、長弟はよく吾に代りて、吾留守中、家事を理め、父上を慰め、小妹と小弟とを愛し敎ゆるか、小妹及びまだ六才に滿たぬ小弟は、如何に、淋しく、悲しく、泣くとなどはなきや嗚呼……思へば吾れ如何なる困難の中にあるも、如何なる辛苦の境にあるも、未だ曾て志を屈して世と濁らず、傲慢にも、大膽にも、自ら任ずる所あり、而して顧みて自己の境遇を見れば、誠に憐れなる一靑年なり、月下、劍を撫して悲歎せる、他鄕流寓の孫策は、今や吾が眼中にあり、石の如く固まりたる吾、鐵の如く冷たき吾、才、苦し……仰で天を望めば、天は高し、廣し、大なり、見る〳〵小さき、固き、冷たき吾も、天と共に快濶、廣大なるを覺へぬ、忽然として風は急になりぬ、大粒の雨は點々として落ち來りぬ、されど吾は山を下りんともせず、悵然として思へらく、吾が慈愛なる母上は既に逝て歸らず、吾が親信する兄弟は續けて四人も吾を棄て去りぬ、女丈夫として、賢母として、耻かしからぬ吾母は、吾等の爲め、父上の爲め、家の爲め、世の爲めに、働き勉めて、一日も世の所謂安樂、喜悅を見るとなくして、其愛せし、英雄たれよ、改革家たれよと敎へられたる、吾等兄弟の立身さへ、見るとなくして逝き給ひぬ、吾が兄、彼れは眞實に、忠正に、日本の商業家とならんとせしも、今は既に此世の人にあらず、吾が弟、彼れは其氣象も、精神も、風采も、吾と同じかりし、母は病の床の枕邊にて、吾に向ひて、御身と藤吉とは安心なりと、言ひ給ひたる、吾が弟、藤吉、彼れが躰は葬りぬ、彼が勃々たる英魂は今ま何處にあるや、吾が妹、彼は其名の如く、容貌も、精神も、梅の如く美くしかりき、而して其アドケなき、マダ七才に滿たぬ廻らぬ口にて、母上よ、今まで苦勞のみ致させたれば、兒は年長けて、女敎師となりて、母上を安樂に暮させ申べしと云ひて、母をして淚を流して、喜び、笑しめたる、其愛らしき、彼は、今何くにあるや、吾が幼弟、生れて百日、丸く肥へ、吾が抱て、暗誦せし書を讀み、詩を吟ずる時は、彼も何やら口の中にて云ふが如かりし、燈火を見て、目を丸し、聲を聞て、頭を廻し、母を見、吾を見て、身を動しつゝ、笑ひたりし、天國の嬰兒、彼は今亡と雖も、猶目の前にあるが如し、若し此親き、愛する母、兄、弟妹のありしならば、共に慰め、共に勵し、如何に嬉く、力强とならんに、嗚呼彼等は皆世にあ

らず、此悲歎に沈る、此孤身改革の戰場に進んとする吾をば、誰か慰むる者ぞ、誰か力を與ふる者ぞ、嗚呼誰かよく此苦心を知る者ぞ、士は己を知る者の爲に死す、若し知る者あらば、男にても、女にても、老人にても、青年にても、吾れ其人の爲めに死を惜まざるなり、然れども悲し、知る者更に無きなり、胸は迫りぬ、呼吸は止まらんとす、……オ、吾れ生きぬ、然り、吾を知るの神あり、吾が兩眼よりは、熱涙雨の如く落ちぬ、四角なる石の上に腰かけたる儘、神に感謝し、祈禱したり、終りて、涙を拂へば、悲憤頓に去り、剛毅、沈勇の吾となりぬ「凡て勞れたるもの、また重きを負るものは我に來れ、我れなんぢらを息ません　馬太傳一一二〇廿」嗚呼吾れ神によりて安きを得たり、慰を得たり。

靜岡より歸りて後、八月四日吾は洗禮を受けて、基督信者となりぬ、吾は非常の苦を受けて、非常の樂を得たり、今は昔しの吾は死し、基督によりて、甦生したり、温かなる愛を得たり、六ケ月以前までは、あぢきなしと思ひし天地も、愛らしき、樂しき天地となり、今年の春の樂しさは、また格別なり、嗚呼讃美すべき我が神よ。

問答

可愛子

問。私は最も貴社の女學雜誌と、女學生とを愛讀して文學上の好友として居りますが、貴社雜誌の外に、東京で、文學雜誌として、見るべきものは、何々の雜誌でありますか。（駿州はな子）

答。日本評論といふ雜誌が一番よいかと思ひます、其外國民之友、日本人、活世界、しがらみ草紙、いらつめ、などいふ雜誌もよろしう御坐います。

問。私は持病で、胃が弱くて、困ります、沸騰散や、胃散や、ラムチや、種々の物を飲み、近頃は醫士の診察を受け、藥用して居りますが、何分にも宜くなくて、困ります、どうか早く全治する工夫はありますまいか。（月長役場一書記）

答。卿は役場にお勤とめあさつておいでのお方ですが、運動の足らないのではありますまいか、私の朋友で、慢性の胃弱に罹つて、苦しんだ者がありましたが、或る醫士の勸めによりて、健胃、强壯の藥を用ると共に、擊劍をするやら、躰操をするやら、馬に乘るやら、鐵炮を打つやら、壯んな運動を漸次にしましたが、今では忘れたやうに全快して仕舞ました、運動は一番の良藥かと思ひます、故に卿も藥を

お用ゐなさると共に漸次に運動をなさつては如何です、又沸騰散や、胃散や、ラムネなどは、一時の抑へで、常に用るといけないそうです、私は醫士でありませんから、委しく御答へ申すとは出來ません。

問。　妾の夫は酒ばかり飲んで居て困ります、妾がそれを諫めて止めやうとすると、大層に怒り、果ては蹴たり、踏んだりなどして、少しも聽きません、如何にもして止めさせたいと思ひますが、ドウカ記者先生の御勘辨を拜借致したいと存じます。（北海道の一妻女）

答。　御心苦の程お察し申します、津田仙君のこしらへた「酒の害」といふ本や、禁酒雜誌、禁酒會月報などをお目にかけては如何です、又女學雜誌次號の附録にある、安藤太郎君の禁酒演説をお見せなさるも宜しう御座います、ソシテ夫をお諫めなさる時も、十分に愛して、涙と共に諫めるやうにするのが肝要ですと思ひます、兎角平生餘程優しいお方でも、餘り亂暴されますと、つひ腹の立つもので、腹の立つ時には、自然情の冷たくなるもので、冷たい情から出た言葉は、人を動かす力はないと思ひます、斯ういふとは今申し上げる迄もなく、十分御存じでせうが序ながら申述べました。

時事

○明治二十四年

二十三年！○二十三年と云へる最と待遠き、最と樂しみありける一年は夢の間に走り去り、今はすでに之れを背にして立つ、明治二十四年とはなりにける。人世の事、多くは意外に畢る、年頭感滿ちて胸迫る、思ふ事の少なきにあらず、言ふて效の多からざるを憾む。左れど、若し吾人をして預言せしめば、本年こそ稍や地の固まるべき時なれ、浮き足の人も少しは本氣に爲るの時なれ、空論の泡、漸やく消ゆる時なれ、論客追々に處存の臍を固むる時なれと言わん。斯て眞正の道に據る所ろの矯風論勢力を得、最と淸き文學、甚はだ遠大なる教育、世上に重んぜらるゝこととなるべし。眞理は最后の戰勝者なり。一年、一年、おひ／＼に眞理の大道に近づく。

○帝國議會の休み

矢張り官省らしくお休みとなりぬ、議員は純然たる官員に左も似たり。所云る十二日間の休みは、三ヶ月の日數に入るや

何如に。若し入らずとせば、暫時頭を冷す爲に頗ぶる宜し、苟しくも然らずとせば、諸君は國事を私の爲に賣る也。

○議員のホーム

議員諸君は定めし夫人同伴にて上京あるべしと思ひ設けぬ、然るに實際は三が一も然あるは少れなりき。左はとて下宿もせず、堂々家を持てる人至つて多し。斯る人、閒居すれば必らずしも君子の行のみある可らず、お休みの中に一應歸國せらるゝと頗ぶる願わし。

○社會改良論者よ

今は特に論者中の廢娼同志者に告ん。本年帝國議會をして廢娼問題を痛論せしめ、其議案の故を以て、議塲を沸々せしむるの一方確かに存す、若し只だ世を騒がし世人の注目を惹くと云ふとを以て成功とせば、現に其方なきにあらず、即はち太鼓を鳴らし、どらを叩くとを以て、戰の勝利を表明するものとせば、目下其方便なきにあらず。然れども吾人は全く之に不同意を表す。宜しからざる權道に據るの社會改良は到底大成功するとなし、吾黨は遲くとも直行して大ひなる道を步まずんばある可らず。苟くも不義の人の手を假て、正々の意見を主張せんとするを勿れ、此に吾黨の大決心、大覺悟を要す。

○櫻癡居士

東京新報の「武藏鐙」、都の花の「橋供養」、ともに櫻癡居士の筆なり。居士は到底小說家にはあらず、何んぞ奮つて再たび新聞界に現はれざる。若くは更に大隱し、何んぞ大日本近世史の編著に手を着けざる。吾人甚はだ其輕々しきを惜しむ。

○三百十圓　　ひさご

日頃しれる小間物屋金春といふ所のある女戶主の宅へ行きし歸るさなりとて訪ひきていふやう、其女のもとへ今三百圓の珊瑚の玉のかんざし金無垢なるをうりてきたりぬ、こはかねてのあつらへ成しかば、先方も商賣物なり、人の金で買事故口錢充分とりし上に、其女主人より手數の禮なりと十圓もらひうけぬと、鼻のあたり蠢めかしてかたりき。おのれ今更この者の强欲あるはいはず、そは必其內に事情ありての事ならんとおもへばなり。されど此女主人てふ者のいかなる技量ありて、かくあまたの金子を他の人よりもらひて、かく無用の物に湯水の如く遣ひ捨つるやをしらず、この事物頻繁なるよに、不景氣の評かしましき世に、慈善事業に人のほん走するよに。

○女學生の股引

昔しと違ひ出歩るくこと多ければ、腰より下たを冷やすこと多し、分けて女學生は、椅子に腰かくること久し、其患ひ特に甚はだしとなす、或る女醫は言へり、女學生の冬の病は、過半下を冷やすより起ると、愼しまずんばある可らず。故に吾人は、毎年股引を穿つことを勸告す、今年も亦た同じきことを繰反すべき也。見榮宜しからずと云はゞ、下衣はペテコート風に仕立つべし、別段股引の外に見ゆることはなけん。

○歌賃

おかちんは歌の褒美にとて賜はりしより餅の異名とありぬ。今は歌がるたの時節にして亦た歌賃の時節あり。かるたに夜深しするも宜しからず、歌賃に餘りお腹を痛むるも亦宜しからず。

○米國女秀才二十大家

米國批評雜誌は、曩に其讀者全躰の投票を募り、米國に於ける高等婦人二十大家の名を指ざせよと、廣告したるに、答へ左の如し。但しインデペンデント記者が之を見て評したる如く、投票者は只だ文學上の意味を以て人を撰びたるに似たり、此を以て、ウイラード。リバモア。マルタ、ラム、の如き女丈夫、此撰より漏れしならんと云ふ。讀む人亦た其心して、左の表を覽玉へと云ふ、

人の名	投票の點數
Harriet Beecher Stowe.	二六八
Frances Hodgson Burnett.	二四一
Mary N. Murfree. (Charles Egbert Craddock).	二一五
Julia Ward Howe.	二〇四
Elizabeth Start Phelps, Ward.	二〇三
Sarah Orne Jewett.	一九三
Mary Mapes Dodge.	一八二
Constance Fenimore Woolson.	一四九
Edith M. Thomas.	一四六
Margaret Deland.	一四二
Adeline D. T. Whitney.	一三五
Celia Thaxter.	一三三
Amelia E. Barr.	一二三
Lucy Larcom.	一一八
Rose Terry Cooke.	一〇四
Mary Abigail Dodge (Gail Hamilton).	一〇二
Harriet Prescott Spofford.	九七
Louise Chandler Moulton.	九七
Mary E. Wilkins.	九六
Blanche Willis Howard Teufel.	八四

○ウイラード女史

万國婦人禁酒會々頭フランセス、ウイラード女史が名聲は日

にいよ〳〵高し。古來未だ如此きはあらず。現今更に世人の耳に響く所ろの風聞は、メソヂスト教會次の撰擧に於て、女史は監督(ビショップ)に推撰せらるべしとの事是なり。



○テムペランス、テムプル

十一月初土曜日にいよ〳〵禁酒大會堂首石を置くの式を執行し、女仙歌を歌ひ、ウィラード、一場の大演說を爲しぬ。此會堂落成の后は、右預想圖の示すが如けん。

寄書

學びの窓の感二つ　明治女學校　鈴木げん子

一日の業全く終へて迎へ得たる爽快初冬の夕暮靜かに樓に上り見渡せば暮色茫々として歸鳥林に急ぎ四隣燈明くして窓に團欒の樂みを寫す庭前の楓樹錦とも見し葉落ち盡して梢淋敷處何を誘ふてか吹く風冷かにして身に染み渡る目を閉ぢて思ひを澄ませば生憎に耳に入る俗喧囂々呼ぶ聲叫ぶ聲走る音跳る響今や都下百萬の人士が朝來爭利の戰ひ闌なるの時なり知ず此間に於ても尙正義の道念は其の光りを保ちつゝあるか思ひ爰に至る時仰ぎ見れば衆星瑩々として天の榮光を漏らし弦月影細く山の端に消ゆ忽ち起る笛音調べ妙に斷々續々覺えず塵世より脫出するの感あり風松梢に嘯く浪岸邊を洗ふ入江の渚に琵琶の音を聞き得たる樂天ならねど亦更に忍ぶ處なくんばあらず。

帝國議會開院に後るゝもの二日にして我校亦自治の制を實施せんとす爰に於てか塾內實に其面目を一變せり昨日迄は食するに其机を同うし眠るに一燈の下に衾を並べし朋友も或は違

く或は近く其室を離れて宛がら染盡せし紅葉の梢木枯し一過せる後の如し凡そ親愛ある故國を去つて四顧皆無識あるときに當り情けを以て慰めの一言を與られたる斗り身に徹して嬉歟はなし況んや一室の中に初めより弟と頼み妹と愛せし朋友と一朝其居を別にし更に新たなる交際を結ばんとする時程事々に付けて悲しきはなかるべし深夜燈暗き時枕を上げて眺むれども傍に眠れるは昨夜迄の面影に異なり聞ゆるものは枯々なる老爺が夜商の呼聲と枕邊時計の針進行する音のみなる時彼等が膓は斷へんとすらん終夜眠り兼ねて思ひ終に最愛郷里に走るものもあらん然り乍ら思ひ見よ改革の容易ならざる古今東西皆然り義の爲めに父母に別れ國の爲めに妻子をも忘る腐敗せる社會に出でゝ卒先改革の任あるもの素より此覺悟なかるべからず夫れ目に見ゆる肉躰の交りは如何に親密なるも時至れば一度びは別離の期なからんやされど若し心に於ける眞心の交情だに變らずば身は設ひ萬里の波濤を隔つとも常に同じき望と恐れとを持ちて終に回り會ふ樂みあらん我國萬代の基礎已に固まれり之れに伴ふ我校の將來望多き哉若し其れ數百年の後我校の歷史を繙くものあらば今年今日を以て一大改革一大進步の日となさん何ぞ一時の情の爲めに一世を左右する貴重の涙を袖に包むの時ならんや。

新誌

可愛子

●時事新報　は昨年十二月二十六日の紙上に於て、新聞紙條例の改正と題し、我國の新聞紙に條例の止むべからざるに至りし所以を述べ、而して現行の條例中、第十九條に見ゆる發行停止の事と、條例違犯の處罸中、發行人又は編輯人を禁錮に處するの箇條とを改めて、一切罸金に處するの法となさんとを希望すと論じ、且つ政府が是まで新聞紙に對して政治の事項に注意したる、其注意を移して社會の面目に差向けんと我輩の最も希望する所なりと勸告し、又新聞發兌の保證金は最も必要なりと云ひて、論局を結びたり。

●國民新聞　は昨年十二月二十五、二十六、兩日の紙上に於て、半死政黨といふ題を掲げて、彼の立憲自由黨てふ巨人は何事をなしたる乎、何事をなす乎、又何事をなさんとする乎、憐むべし、笑ふべし、愧づべし、彼れは眠れり、彼れは忘れり、彼れは擾れり、彼れは半死せりと、口を極めて叱り、罵り、激まし、今日の儘にて經過せば、立憲自由黨は半死政黨に止まらずして、全死政黨となるも未だ知るべからずと警告す、其辯恰も蘇秦の諸侯に說きたるが如し。

●郵便報知新聞　は昨年十二月二十六日、國會と新聞紙てふ題を以て、新聞紙が社會を忘れ、國會が國家の經營を忘るゝの非を辨じ、而して新聞紙と國會とは二樣のものにあらず、兩々相呼び、双々相呼んで、社會の改良を圖るべく、國家の經營を資くべしと、新聞紙に向て、國會に向て、注意を促したり。

●東京日々新聞は　昨年十二月二十五日の紙上に、豫算委員に望むといへる題を掲げ、徒らに審査の紛議に時日を送り、爲めに前年度の豫算を施行するを得るの機會と、辭柄とを、政府に與ふるあらば、委員諸氏は、何の面目ありて天下に見ゆべきやと勸告したり。

●讀賣新聞は　昨年十二月二十六日休會官吏多休暇と題し、議會が二十五日より休會し、廿四年一月八日開會する、其間の休みの長き、議長の報告既に驚くべし、而して議會が多數を以て之を可決したるは更に驚くべしとの事を述べ、吁々言ふ勿れ、官吏休暇多しと、議會は更にこれより甚しきものあり、余輩請ふこれより議員休暇多しと云はんと論じたり、鹽の味を失ひたる議員諸氏、讀んで而して如何の感ある乎。

通信

可愛子編

山梨縣通信

●都留郡婦女の有樣　養蠶製絲機織と春夏秋冬些の間暇もあらず朝は暗きより夜は晩くまで職業に勉强するとは他の縣他の郡の婦女達の夢にだも知らざる所なるべしたゞ惜むらくは之が爲めに女子教育を度外視するに至れることを。

山口縣通信

●私立山口英和女學校　は一月十二日より開校の都合なり校長は服部章藏氏雇教員はエーレス氏夫婦にて殊に夫人の擔當なり和漢學の教員をも雇ひ入るゝ都合なり又三四月には米人ダウチー氏夫婦を聘する筈なり當校設立の目的は修身を基とし和漢學其他婦人に必要の技藝を敎へ正則英語を授け將來文明社會の慈母節婦を養成するにありといふ。

福井縣通信

●福井縣の女子職業　福井市を始め武生、鯖江、三國、大野、勝山等到る所近來絹織物業の盛なるが故に女子は競ふて之に從事し彼の醜業を營むもの丶如きは尠なし。

●眞田　福井市の士族林藤五郎氏の發明する所にて藁髓をとり眞田編みをなし之を米國に輸出す其品は色純白にして形織少なり同市の婦女子は今ま多く其製造に從事し居れり。

千葉縣通信

武本淳

●婦人公友會　は縣下夷隅郡にあり同郡有志の女子を以て組織せらる其目的は女子の團結を計り併せて知識を交換するにあり。

●千葉師範學校女子部　に於ては昨年冬頃より釵及び襟留に徽章を附したり。

●二女子の運動　千葉町に住する渡邊はる子榊原よね子の兩氏は昨冬縣會の開會中廢娼の事に付き議員を訪問し且つ建議書をば議場に提出し熱心に働かれたりとぞ。

鳥取縣下女界の實況

愛鄉生報

鳥取縣は山陰地方に僻在する故何事も後ればせなるが殊に婦女子の程度は至て卑く其一日の工錢平均二錢五厘位なれば中々に生活も六ヶ敷程なれば況んや教育の事に至ては中以下には皆無と申しても敢て過言にあらざる次第にて其淫猥放肆なる實に言語に絕したる姿なりしが併し是れ亦時なる哉時運と申すものは何れの隅々までも見舞ひ行くものにや斯る鳥取地方にも何時の間にやら二ツの婦人會と二ツの女子の手にてなりたる學校起れりソハ一を鳥取婦人會と云ふて少しく保守的の妻君達之を創め其機關として鳥取女學校あり他を鳥取基督敎徒婦人會とし其後採たる鳥取英和女學校あり共に陰々裡に競爭の勢あれば何れも腐敗に流れざるべし扨又一ツの幼稚園あり專ら市中有志の手になれり入園男女の兒輩凡そ六七十名ありて其保育は田中幸子女史之を掌る余輩之を一覽せしに中々行屆きて將來賴母敷く思はれたり。

女報

可愛子編

●女王殿下の歸嫁　兼て本紙上に記載せし、朝彥親王の第三女、安喜子女王殿下は勅許を經て、昨年正三位侯爵池田章政氏の男、正五位池田詮政方氏方へ歸嫁せられたり。

●貴夫人の參內　三條公爵夫人、山縣總理大臣夫人をはじめ、各大臣の夫人方は、昨年十二月二十五日午後、漸次參內、皇后陛下に拜謁、御機嫌を伺ひたり。

●華族女學校　は昨年十二月二十四日終業、本年一月十二日より始業の由。

●暴行者の拘引　昨年十二月十七日、京都の遊客移轉論者、大澤善助氏を、歸途に要擊したる、坂口芳三郎といへる者は、同二十七日、京都下京警察署に拘引せられぬ。

●廢娼建白に調印　大和の南部、五條高田地方の基督教育年會は、大和全國の信徒を勸誘して、來年早々廢娼の建議を政府に呈せんとて、昨今委員を派して、建議書に調印せしめ居ると云ふ。

●廢娼請願　明治二十三年十二月二十四日、大坂府下基督教信者三十名は、貴衆兩議院へ廢娼の請願書を差出したる由。

●廢娼建議をなさんとす　山梨廢娼義會より、重なる人々の連署を以て、昨年十二月二十五日、議會に廢娼建議をなしたるが、間に合はずして、書面議場に出でず、捧呈委員の手にあり、本年議會開くを待ちて、更に提出せんとなし居るが、今又別に四八代郡久那土村なる上田龜吉氏も、廢娼建白を出さんとて、各地に演說會を開き、同志者を勸誘し居ると云ふ。

●多くなりしもの、喜ばしからぬと　昨年の歲末は、不景氣の歎聲多くなりたり、喜ばしからぬとなり、而して此際藝妓の鑑札を願ひ出し者四十六名、廢業せしものは僅かに十名なりと、嗚呼眞に喜ばしからぬとなり。

●最傑出の作、不知庵主人の評　昨年十二月二十五日の國民新聞に「最傑出の作」と題せし、不知庵主人の評あり、今ま之を左に掲げむ。

江戸棠は投票を募りて傑作十種を選ばんとするなれば世間多數の認識せるもの定めし世に現はるべしと思へども唯余が考ふる今年の傑作を擧げむ、舞姫(鷗外漁史)拈華微笑(紅葉山人)いちご姫(美妙齋主人)一圓紙幣の履歴(坪内逍遙)一口劍(幸田露伴)うたかたの記(鷗外漁史)聽天門(學海居士)以上十種に充たざれども一年に斬く多きを見るは極衰にもあらぬ證なり別に一種の七作にもまさりて二三等超出するものは本年一月一日刊行の女學雜誌に載せられし、忘れがたみ(若松しづ子)なり見る人其名の文界に新らしきと並びに女性なるとをもて輕々に看過する勿れ(附圏は原文の儘)。

●スタンレー氏遠征別軍の獸行及び其非命の死　彼のスタンレー氏が途中にて分ちたる遠征別軍の命令官バーテツト、ジェームソンの二人は、其部下と共に、亞非利加內地に於て、土人の妻女を辱しめ、土人の士卒を鞭打し、虐殺し、或は土人に命じて、其小女を殺し、小女の肉を食ふとをなさしめて、之を繪畫に寫し、或は銃殺したる土人の首を斬てアルコール漬となして、龍動なる妻女の許に送りたるなど、言語に堪へたる獸行ありしより、彼等は土人の爲めに惡まれ、部兵と共に一人も殘らず、非命の死を遂るに至りたるなりといふ、委しくは昨年十二月二十六日發行の日本新聞紙上にあり。

●三嶋一雄氏の印度紀行　は昨年の每日新聞に連載せり、十二月廿六日の紙上には、印度女子の早婚、其子供の遊隋、寡婦虐待の有樣、ラマバイ女史が此等の弊風を改革せんとするとなどを載せぬ。

週報

●宮庭　昨年十二月二十五日天皇陛下赤坂離宮へ行幸第一師團將校の打球を天覽遊ばさる。

●政治　昨年十二月二十二日夜山田司法大臣辭表を呈出す●二十三日內閣會議あり●二十四日貴族院の委員會開く●二十五日山田司法大臣の辭表は聞こしめし屆けられず現任の儘病を養ふとを許され大木樞密院議長臨時司法大臣を兼ぬべき旨御沙汰ありたり。

●經濟　昨年十二月廿二日豫算委員會開く●同二十四日關西鐵道開業式あり二十五日より全通。

統計

○牛

昔しは牛を食べるとモウ〳〵になると言ひ、けだものにでもなるやうに思ふて居ましたが、今ではお姫さまでも召し食るやうに成ました。每年、日本中で食用の爲に殺す牛は凡そ十万疋です。一と月に八千三百三十三疋で、一日に二百七十七疋です。

○學校

日本中の小學校は、二万六千で、教員は男が六万人、女が三千人。生徒は、男が二百万人、女が八十六万人です。又高等女學校と云ふものは、公立私立合せて十八、男の教員が七十人、女の教員が百人、生徒は無論女で、二千三百人あり、其外普通の高等英和女學校は凡そ五十もありましせう、其生徒は少なくとも、四千人以上です。

○取あげ婆さん

產婆は古しの取あげ婆さんで、甚はだ老人のやうですが、ミス何某と云つて、今年十六七才の令孃が產婆の免狀を取ると云ふ今日では、產婆と云ふは少しチカシナもので、ミス產婆即はち產婆孃とでも言われば成ますまい。日本中で、現今免狀を持つてるものは、三万人です。お醫者さんが全國で四万人しか無いに比ぶれば餘程のものです。

定價

一冊。	六錢 郵税。五厘	(但府内無郵税)
十冊。	五拾八錢 郵税。五錢	(同前)
半年分	壹圓四拾三錢	府外は壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は貳圓八拾六錢

東京市麴町區下六番町六番地

發行所 女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

理化學的應用實効

三能 色を白くするしやぼん

定價一個十錢より

○抑此しやぼんは第一身躰の色を白くし。御顔の艶を出し。第二肌のしみ又はにきびそばかすをとり。第三種々のふきでもの丶毒を消すべき大効あり。故に名づけて三能しやぼんと云ふ。常に御用ひなされ候へば色を白くすること雪をも欺むく計りにして。性來色黑き肌。又は何となく色惡しき肌の御方始め自然に出來たる肌のしみ腫物の跡に至る迄御用ひなさるうち知らずしらず消えて艶美なる御肌になること疑なし。殊に諸傳染病の看病人などは常に之れを用ひ身躰を洗ひなば其感染を防ぐこと受合あり御試用の上眞に三能しやぼんの名に背かざるを知り賜へかし。





●みづむし●糸かせ●いんきんたむしは常に御用ひなされ候得ばしぜんになをります。

製造人　西條重兵衛　倘くはしくは本能書にあり。

發賣元　東京銀坐一丁目　**佐々木玄兵衛**

特約販賣所

日本橋區通二小間物店　柳屋
同村松町寶丹水　岩涙長藏
同兩國廣小路五臟圓本舖　大木口哲
同瀨戸物町藥種問屋　玉置金八
同元大坂町清婦湯本舖　高木與兵衛
同上槇町萬金膏本舖　安川榮次郎
同馬喰町一丁目小町水　平尾賛平
同本石町二丁目十軒店　森谷萬次郎
同横山町一丁目洋物店　椙谷商店
同同町小間物問屋　近江屋源七
同坂本町角賣藥店　德田多助
同新右衛門町賣藥店　はたや
同親父橋角芳町　堺屋武助
同通一丁目木原店席亭向　丸れこ
同芝神明鳥居内藥舖　岩本新兵衛
麻布區飯倉三丁目洋物店　宮島
同六本木町洋物小間物店　木村屋
同長坂町保玉散本舖　堀井
赤坂區一ッ木町角洋物小間物店　松下
同同町洋物小間物店　和泉屋
四ッ谷區傳馬町小間物問屋　山形屋
同十三丁目藥舖　河合治兵衛
同大通角小間物紙店　相摸屋
麴町區麴町三丁目藥舖　田部重兵衛
同同町小間物店　藤田屋
同三番町藥舖　雨宮藤吉
小石川諏訪町一等散本家　花樂堂
本鄉區眞砂町藥舖　尾澤蒼生堂
下谷池の端仲町寶丹本舖　守田
同外神田富松町寶丹支店　長尾
同天神町一丁目寶丹支店　柳澤
同車坂町櫻香油本家　堺屋重兵衛
淺草區駒形町小間物店　中島屋百助
同黑船町樂屋洗粉本家　梅素亭
同西三筋町角小間物店　龜屋淺吉
同公園淩雲閣五階目出品　岩涙
同新畑町一香地子宮玉本舖　清水
神田區柳原通富松町寶丹支　唐伴
同小川町銀杏木前藥舖　笠井賛生堂
同五十稻荷前藥舖　知新堂
同同所入口角洋物店　信盛堂
同錦町一丁目小間物店　西野小平

右の外藥舖賣藥舖和洋小間物店に取次差出之有候に付御最寄にて御購求御試用の程願上候。

京橋區銀座二丁目　岸田吟香
同三丁目萬金丹本舖　㊇藥店
同南傳馬町一丁目　伊勢屋藤兵衛
同竹川町角小間物店　丸屋松五郎
同八丁堀大通小間物店　和泉屋
同元數寄屋町三丁目藥店　結城屋
同築地二丁目賣藥店　近藤宗兵衛
同入船町四丁目角櫻草店　橋本均一
芝區芝口一丁目十五番地　はしや
同櫻田伏見町角小間物紙店　豐田屋
同久保町交番所角　大菱堂
同佐久間町一丁目角紙店　服部
櫻川町藥舖　保生堂
同西ノ久保葺手町藥舖　山崎日進堂
同櫻田備前町毛利邸前藥舖　梅田
神田區冶集舘内紙石鹼店　松壽堂
同表神保町二番地藥舖　救生堂
同同洋物小間物店　享榮堂
同南神保町化粧品專賣店　おきなや
同一ッ橋通町七番地　北信堂
同同八番地　橋本吉助
同淡路町二丁目藥舖　眞壁
同猿樂町一郵便取扱所　吉村
同鍋町大通藥舖　中澤條助
同同町大木町店　齋藤辰造
品川宿停車場構内洋物店　淺子
品川宿洋物小間物店　相川
●横濱尾上町四丁目藥舖　鈴本
●同賑町一丁目賣藥店　里見亭太郎
●同伊勢崎町洋物店　小池金次郎
●同太田町四毛糸編物所　山田
●同境町洋物小間物店　近榮
●同野毛町一小間物店　吉岡
●同辨天通四丁目角　信濃屋
●北海道函舘末廣町小間物店　新田
●横須賀旭町表門前　豐平屋
●同汐入町寶藥店　山本賀平
●同大瀧町洋物店　松本源次郎
●相州大磯茶屋町　三宅藤兵衛
●同小田原町縁町諸色小間物店　油久
●靜岡紺屋町　日上部源七
●甲府肴町藥舖　村田屋七右衛門
●仙台大町四丁目　高橋藤七



こわれ指環

つゆ子

あなたは私の此指輪の玉が抜けて居り升のがお氣にかゝるの、そりやアあなたの仰つしやる通り、こんなに壞はれたまんまではめて居り升のは、餘まり見つとも能くあり升んから、何ありともはめかへれば、宜しいので……ですが私の爲には此指輪のこわれたのが紀念であり升から、どうしても之をはめかへる事が出來ないのです。あゝ月日の經つは誠に早いもので此指輪を壞はしてから、もはや二年越になり升。其内度々皆さんが、なぜそんな指輪を箝めてるの、あまり不似合じやアないかと、仰しやい升たが、是には實に深い子細のある事で、夫れが爲め、强て其儘にはめて居り升のですが、外ならぬあなたの事、いつそ此指輪に就ての私の經歷をお話し致し升う。誠に私は、此指輪を見升る毎に、腸を斷ち切らるゝよりもつらい思ひを致すので……ですが、是は片時も私の手を離す事は出來升ん、夫れは何故と申せば、此指輪は、實に私の爲の大恩人なので、それは又何故かと申せば、此指輪が、私に幾多の苦と歎きとを與へて呉れ升たお蔭で、どうやらかうやら、私は一人前の人間にならねばならぬといふ奮發心を起し升たからの事で。ですから、此指輪は、いつも私の志氣を鼓舞し、勇氣を增すの媒となり升て、私の爲には此上もなき勵まし手なのでムり升。………、人から御覽なされば、大層見苦しいようでムり升うが、私にとつては、實に千万金にも替へ難い寶で、眞に私に似つかわしき品なのでムい升。あなたはまだ、私しの委しい經歷は御存じないでしやうが。私の身の上は、實に此こわれ指輪に能く似て居るのでムり升。此指輪と共に、種々の批難攻擊を人から受け升が、心あつて壞した指輪、あんの夫しきの事は兼ての覺悟でムり升もの、別に心にも止め升んが、或時は此指輪を見て、嗚呼妾と共に憐れある指輪よと、不覺の淚に暮るゝ事もあるのです。けれ共、又心をとり直して、人はいざ、神は私の心を知ろし召して下さい升から、と思ふて、自ら慰めて居り升。嗚呼このこわれたる指輪、此指輪に眞の價の籠つて居るとは、恐らく百年の

後あらでは、何人にも分り升まい。

何だか改まつてお話しを致し升うと存升たら、もう胸が一ぱいになつて參り升た。忘れも致し升ぬ、私が此指輪を私の手に箝る事となり升たのは、今より丁度五年前のことで、私が十八の年の春であり升た。私は丁度其春結婚致し升たので……夫から贈られたものなんです。けれ共只今で申升契約の指輪などと申積りて與へられたものではあり升ん、只何心なく私に買て呉れ升たものでムり升が、今から申せば、之れを契約の指輪と申しても差支はないのでムい升う。

全躰其節、私が結婚致し升た頃あとは、女子敎育の種子が、漸くちらほらと、蒔かれたと申位の時で御坐り升たから、私も今日の思想の半をすら持ち升ず、殊に私は地方に居り升たものですから、全じ五年前でも、東京の五年前とは餘程違ひ升て、西洋人の夫婦間のありさまなどは、全く夢にも見升た事はムり升ず、又完全なる婚姻法はどんなものと申事も聞かず、只々日本古來の仕來りのまゝをあたりまへの事と心得て居り升た。そして、又私が敎育を受けた女學校あどでも、其頃は、專ら支那風の脩身學を修めさせまして、書物なども、劉向列女傳などゝ申樣なものばかり讀ませて居り升たから、私もいつとはなく其方にのみ感化され升て、譬へば見も知らぬ結髮の夫に幼少の時死別れたればとて、夫れが爲に鼻を殺ぎ耳を切りて貳心なきを示せしとか。或ひは姑が邪慳で嫁を縊り殺さうとしても、婦には一も自ら去るの義なしとて、夫の家を動かあかつたとか申樣な事を、此上もなき婦人の美德と心得て居り升た。ですから、其時分の考では、夫といふものは、實にどの樣あ人が當るかも知れず、丁度彼みくじとか申ものを振るやうに、吉でも凶でも當つたものは仕方なく、只々天命に任かし、自分は自分の義を守り、生涯を潔く送るまでの事と覺悟致して居り升た。夫れに、母は女大學をソックリ其儘自分の身に行て解釋して見せたと申位の人であり升たから、父に對し升ても、敷居を隔て、手をつかへてゞなくては滅多に話しなどは致し升ず、すべて父へのあしらい方が、お客樣に接する樣であり升たから、私は子供の時から、なぜよそのお父さんは、あんなに心易いのだらうと、餘所の父子の間柄を、不思儀に思ひ升位いであり升た。左樣に母は父に遠慮ばかり致して居り升たものですから是にも亦た大ひある感化を受け升て、私は只何角あしに、婦人の運命は憐れ果敢な

いものよとのみ思ひ込んで居り升た。けれ共、其頃既に幾分かどつかに承知の出來ぬ處があり升たものと見へ升て、時々は、どうも婦人の運命は誠につまらないが、どうか私は一生人に嫁がないで、氣樂に過す事は出來ぬ事かと、思ふた事もあり升た。そう致して、十五六歳の頃でムり升たろふ、しきりに父母は私に結婚を勸め升た。夫は一度や二度の事ではなく、斷つても〳〵、不思議に、またか〳〵と思ひ升ほど、此處はどう だ、彼處はどうだと申て、いろ〳〵のさきを勸められ升た。けれ共私は只いやでムい升〳〵の一點張りで、押通して居り升たが、始の内こそ、母も何分まだ年が參り升せんから、も少し見合せ升ても……と、父に申て呉れ升たが、十八といふ年の正月になつた時は、もうもう、母も、私の爲に辨護の地位には立て呉れ升んでした。そして父も、此時はもうそろ〳〵少し腹を立て升て、我儘なことをいふ奴じや、全躰おまへの躾が惡いからッて、時々母にまで小言を申樣にあり升た。かくて或日の事でした、父は私を一寸と、居間へ呼び升から、何の用かと行て見升れば、父は私の座に就き升のをまち兼たといふ面持にて、斷然と結婚の事を申渡し升た。其時の私の驚き、實に思ひ出しても冷汗が出る位です。兼てよりかくのたまはゞ、こう、こうのたまはゞ、かくと、いひわけは、どれ程か思案も致して居り升たが、其時のやうに、斯くすつかりと斷定してこうしろと命令を下されんなどとは、思ひも寄り升んでした。ですから、只呆氣にとられ升て、只ツーッと、父の貌を見上升たが、父は嫌といふなら、いつて見よといはぬ斗りの、意氣込でした。然し母も脇に坐つて居り升たから、何とか申てくれるとと信じて、心待に待て居升たが、母も父の權幕に恐升たか、但は兼て承知致して居升たものか、何とも申て呉升んで、只心配そうに私の顏を眺め、早くハイと申上よといはぬ斗に、眼顏で知せて居升た。私は斯く兩方から柔に剛に睨れ、何と申て宜敷やら分らず、殊に常から餘り心易はなき父、誠に當惑致し升たが、終に一生懸命で、振ふ唇を嚙〆て、「何分まだ勉强が足升ぬから、今少し御猶豫を」と、牢いはせず、父はピカリとしたる眼にて、私を睨み、「何ッ勉强が足ない？と、馬鹿な事をいふッ、普通の勉强はさせたでないかッ？。何が不足？。何が氣に喰ぬ？我儘者めが」。と鋭もいひ放升た。母は惡とをと申す面持にて、私を見遣り升たが、私は左る了見で申升た事ではあり升ぬといひ譯致んに

も、頓ゝは口へ出ず、漸くにして、又、「どうか私は、東京の女子師範學校へでも參り升て」といはむとせしに、是も亦半途にて父に遮られ、「何ッ、師範學校、フウン、小學校の教師になつて、夫からどうするチユウんだ、一生獨りで遣り通すといふ事は容易に出來るもんじやアないッテ、その、そんな、そのわけの分らない事をいはないで、いふ事を聞くが宜しいッ、今更どうあるもんか、お母さんに話してあるから、能く聞くが宜しい」ッて、ポイと立て、何處へか行て仕舞い升た。あとで母はしみ〴〵と私に申し聞かせ升た、お父さんの御性分として、あの樣に仰しやつては、滅多にあとへはおひきなさるまい、殊に此度の先は余程お父さまにもお氣に召した樣子、これ仲人も彼の松村氏なり、必ず爲め惡しくは計らふまじ、これほどの履歴もあり、これ程までの學問もあるとの事、容易く得られる縁談ではないほどに……そして、女子といふものは、能い加減の時分に片付ないでは、とう〳〵能い先を見失つて仕舞ふもんだから……」と、遂にはおろ〳〵聲になつて説諭し升た。私も只今ならば、なか〳〵是等の事に得心は致しませんが、其時はほんのおぼこ娘であつて、そして又到底一度はどこへか遣らるものと覺悟して居り升たから、心弱くもうけひくとはなしに、うけひき升た。今更思へば、私はなぜ此時に、も少し手強く斷らなかつたかと、我ながらも不思議な樣に思ひ升。夫から、母は、見合の事をいひ出し升て、明後日都合が能くばと、先方からの申込、善は急げだから、お前も其積りで、明日は髮をも結ひ、着物や襟の取合せなども考へて、置くがよかろふと申升た。あれ共、私は此時、何と申て宜敷やら分りませぬから、只ハイと申升たもの丶、其の後我部屋へ歸り升、つく〴〵と考へて見升れば、既に九分九厘まで父が極めた結婚、見合ひを致した上で、嫌と申た處が其申條の立ッ筈もなく、只恥かしき思ひをして、先方に顏を見らる丶計りなるは、實にどうもつまらないと思升たから、態と片意地に見合ひをする事は嫌ですと、母に申張り升た。今から思へば、是も亦馬鹿なことで、實に私の失策でした。けれ共、亦退いて考へ升れば、私は幼き時から、學校の友達か、親戚の外は、滅多に人に逢た事は御座ひませず、父の客などが參り升た時なども、たま〳〵私が玄關などにうろついて居り升と、いつも母がそれお人が入らしッた、はやく隱れよ、そ

れそちらへと、納戸へ逐遣らるゝが習はしとなつて居り升たから、人を見る目などはなかく／＼もつて居り升んでした。ですから、假令此時見合ひを致し升た處が、矢張何も私には分らなかつたので、なまじい極まらぬ前に見て、兎や角と心配致したよりも、寧ろ暫くでも、嫁入はいやとおもふ内に、若しやどういふ人かと幽かにボーッと樂しんだ處もあつただけが、まだしも幸だつたかと、責てもの思ひ出にして、あきらめて居り升のです。

夫からとう／＼其年の彌生、櫻の咲といふ頃に、まづ／＼結婚は濟し升た。けれ共、なぜか私はどうしても其夫に馴染む事が出來ず、二三ヶ月といふものは、まるで自分は、一生爰の家に居るべきものか、何だか分りませんでした。夫は私を愛して呉れたのでもあり升うか？、時々博物場や、何かへ、連て行て呉れ升て、何を買て遣らふ、角を買て遣ろう、などゝ申し升た事もあり升たが、私はどうものを買て貰ふ氣にはなれませんでした、夫は何故かなれば、私はどうも、其處の家の人になつたのか何だか、自分にちつとも心が落付きませんからの事で、そして一所に歩行いたり、何か致し升ても少しも、樂しい事はなく、たゞ／＼我里に居り升た時の事のみを思ひ出し升て、何處へ參り升ても、おゝお母さんや姉さんと一處に此處へ來たならばと、夫ばかり思ふて居り升た。

其内、或る日の事でした十五六ばかりの小女が、何處からか手紙を持て使に參り升た。下女は何心なく執次で、私の傍へ持て參り升を、夫は何故か急き手を差延まして、こちらへ持て來ればいゝじやないかと、下女を睨みつけました。私は何の事だか少しも分らず、つまらぬ事に腹を立てる、怖らしい人よと、不圖心に思ひ升た。夫はやがて、彼手紙を見終りていつになくくる／＼と巻て袂へ入れ、何れこちらから返事するといひ置けと、下女に申付て、彼使を戻し升た。そして其晩の事でした、一寸と近處まで散歩に行てくるからと申て出て行きましたが、十時になつても、十二時になつても、歸て來ず、私は是非夫の歸り升迄はと存升て、褥をも布かせず、幸の折柄と、學校の友達へ送る手紙など認めて居り升た。其内、段々夜も更けて參り升から、私は兎に角下女などは休ませやうと存升て、先に寐かし升たが、一人の下女はお淋しからふからと申て、私のとぎに、傍へ參つて居り升た。そして

私が手紙を認めて居升のをつく〴〵と見升て、どうも、奥様は、結構なお手を持て入らつしやい升、先の奥様はと、うつかりと申升た。私は其先の奥様といふ詞が、フッと耳にとまり升て、「ヲヤ、私のさきに、誰か居たのと、」思はず下女の貌を見詰め升た、此下女は、私よりもズッと以前に此家に傭はれて參つたので、何も角も能く存じて居升のですから、今私に問掛られ、餘儀なくこう答へ升た。「ヲヤ、私と致升した事が、ついうつかりと………、かような事を申し升ては、旦那さまの御叱りを蒙り升うが、もう仕方がムりませんから、申上升う、夫れはあなたのお越になる五六日前までも、此お家に居たお方があり升たので、たしか旦那さまが、書生さんの時分に、下宿なすッて入しつたお宅の娘さんなそうでムイ升、と、一伍一什を語り升た。さては、晝間のあの使ひ………、多分………と思ひ升たが、下女の手前左る氣色は見せられずと、わざと冷淡に、そう、そうかへと、聞流に致して、置升た。けれ共、此の時から、何となく心持が惡しくなり升て、誠につまらぬ事をする人よ、其様な婦人のあるならば、始より私を迎へねがよし、又迎へし位ならば、左様な事を止むべきにと、思ひ升たが、素より左る事を口外致す筈でないと、獨り心に秘め升て、面白からぬ月日を送ッて居り升した。夫から後と申すものは、三月より四月、四月より五月と、段々に夫の外出が繁々になり升して、遂には三日も四日も、何れへか行きて、家に歸らぬとなどもあり升た。始めの内は、私も二晩三晩も眠らないで、待つて居り升たが、幾夜も續き升と、もうそう〳〵は眼も續かず、ついとろ〳〵と眠る事もあり升たが、もの事と申すものは、何でも生憎なもので、左様な晩に限り升て、夫は深更に歸て參り升た。門を叩く音が不圖耳に入り升て、急ぎ戸をひき明れば、夫は酒氣を紛々とさせながら、私を睨み付け升て、「なんだ、先刻にから戸の破れる程叩いたじやあないか、なぜ明ない、隣家へ聞ても不都合じやないか、夫を戸外に立せて置て、優々閑々と熟睡して居とは、隨分氣樂な先生だ」など、囁かるゝ心苦しさ。夫等の事は、忍ぶ事も出來升が、夜中斯く怒の聲きこへては、下女などが目を醒し誤て夫の歸りの遲をば、私が兎や角言ひ爭ふなど思はれ升ては、實に不面目極まる事と思ひ升たが、夫れを申出せば猶更小言かるゝことゝ、ぬれ紙にでもさはる樣に、あなたの御無理は御尤もと只管に誤まり入り、どうやらこふやら、睡りに就て貰ふ事は度々で御座り升た。かゝる度毎に、私は、學校に在つた時の事など思ひ出し升て、我同級の尤も仲善か

りし某姉も、まだ獨身であるものを、誰某も亦今は學校に奉職せられしと聞くに、妾のみはなど心弱くも嫁入して、かゝる憂き目を受る事かと、不覺の涙に暮れたる事もあり升た。父は其頃遠方へ行き、里には母のみ殘つて居り升た。母は流石に女親とて、是等の事の察しも早く、私がたまさか里へ歸り升度に、どふやらそなたは、近頃顏色も惡ひ様だし、たいそう痩た様だな、なにか心配でもあるのではないか、お父さんがこちらに入らつしやれば、どうとも御相談の申様もあるけれ共、女親の私では申た處が仕方もあるまい、まあ〳〵兎に角、お前の身を大事にして、あんまり心配せぬが宜しいと、いはるゝ時の悲しさ。泣まじとは思へど、平常氣の知れぬ夫の傍に居て、口善惡なき下婢の手前などに氣をかね、一圖に氣を張詰めたる身ですから、たま〳〵嬉敷母の詞を聞いてはしみ〳〵母の慈愛が身に徹して、イヽエ、なに、心配などは御座り升ぬと、口には立派にいひ放ち升ても、相憎に漉なす涙は、私よりも正直に、母に誠を告げ升た。私は其を見せじとて、ソーッと、手巾もて目を拭ひ、そしらぬ顏で母の方を見升れば、母は私より先に、はや眼の縁を眞赤にして、居り升た。かゝる事が度重なり、母は終に、夫故と申でもムり升まい?、あれ共、平常から病身の身とて、遂に全く床に就く事となり升て、程なく私の事をいひ〳〵果敢なくも、私が十九の秋朝の露と消へ失せ升た。其時の私の心の裏、申もなか〳〵愚な事でござり升た。最初は、母も私の身を早く片付て安心せんと思ひ、私も母が餘りに心配致升から、母の心も休め度と、すゝまぬ結婚を致し升たが、其結婚が仇となりて、母の命を縮めたかと思ひ升れば、胸も張裂る様でござり升た。なれ共、私は是も皆私の行屆かぬ故と、觀念致升て、叶はぬ迄もと、尚も不遇悲慘の裏に二年の月日を送り升た。實に反動と申ものは恐ろしいもので、私は此結婚后の二三年間に於て、いつとはなく、非常に女子の爲に慷慨する身となり升た。尤も其頃は、丁度女權論の勃興致しかつゝた時で、不幸悲慘は決して女子の天命でないといふ説が、漸やく日本の社界に顯はれて參りました。私も平素好めることとて、家事紛雜の傍らにも、とき〴〵の新刊書籍、女子に關する雜誌などは、斷へず座右を離さす閲覽して居りましたものですから、いつとはなく、泰西の女權論が、私の惱底に徹し升て、何でも日本の婦人も、今少し天賦の幸福を完ふする様にならねばならぬと、いふ考が起つて參り升た。夫故へ、一つは自分の憂鬱を慰むる爲め、一つは世間幾多の婦人達の不幸を救むとの望みにて、時々小六か敷ことなどを申す身となり升た。扨そう

なつて見ると私の覺悟が餘程變つて參り升た。夫迄は支那流義に、只何事も忍んでさへ居ればよい、自分の幸福をさへ犠牲にすれば宜しいといふ、消極的の覺悟であり升たが、此時からは、もはや夫れにて滿足が出來ず、どうぞ、私の不幸は兎に角、夫の行を矯め直して、人の夫として恥かしからぬ丈夫にならせたいといふ、一歩進んだ考になり升た。夫故たび〳〵、眞心の諫めを盡して見升たが、何分夫は私よりも遙か年も長け、私よりも万事に經驗を積で居り升ものですから、私の申す事は、容易に心に止めませんで、後には何か申出し升と、又しても賢しげに女の分際で少しの文字を鼻に掛くるかと、一口にいひ消して仕舞ふ樣にあり升た。是も私のまことが足らぬからの事、私に夫れだけの價値がないからの事で、あはれ私に、モニカほどの力はなくも、責て今少し夫の敬重を惹く價値があり升なれば、坐ろに身を悔む樣になり升た。あれ共破れた布は容易くつくろひ難く碎けた玉は元のまゝにはあり難い譬の樣に、其處には又樣々事情があつて、とても私の力には及ばぬ樣に思ひ升たし、又私が傍に居り升てはよしなき、反動を夫に與へて、夫の爲にも、却て宜しくあるまいと存升たから、とう〳〵心を定め升て、不本意ながらも、終に双方で別るゝ事となり升た。夫故私は只管世の中の爲に働こふと決心し升たが、私は紀念の爲に此指輪の玉を拔き去り升て、彼勾踐の轍に倣ふとにはならねど、朝夕之れを眺め升て、私が此玉を拔き去りたる、責の輕からざることを思ひ升て、良しや薪に伏し肝は嘗めずとも、是非とも此指輪の爲に働いて、可憐なる多くの少女達の行末を守り、玉のやうな乙女子たちに、私の樣な轍を踏まない樣、致したいとの望みを起したので御坐り升。

とはいへ今では追々結婚法も改まり世間に隨分立派な御夫婦も御坐り升から、夫等の方のありさまを見升と、なぜ私は、あゝいふ樣に夫に愛せられ、又自らも夫を愛するとが出來なかつたのかと、此指輪に對し升て、幾多の感慨を催す事で御座り升。

只幸に私の父は今猶壯健で居り升て、大に私の多年の辛苦を憐んで呉れ升て、老軀が良しなき關渉より、可惜若木の枝を折らせし事よとて、絕へず書を寄せて私を慰めて呉れ升て、今は却て私の志望を賞し、頻りに私を勵まして呉れ升から、私は是を何よりの樂しみに、悲歎中に、樂しき月日を送つて居升。只此上の願には、此こはれ指輪が其與へ主の手に依りて、再びもとの完きものと致さるゝ事が出來るならばと、流石に此事は今に…………

知盛卿

第一回　山寺

まつかぜの、　音訝えわたる
夕まぐれ、　ねぐらにとまる
鳥が音も、　いまはきこえず
なりにけり、　窓のすきもる
ともしびの、　光りもさむし
木の間の山寺、
世を捨てゝ、　すがたをやつす
すみぞめの、　ころもの袖も
うちしめる、　とほき旅路の
くさまくら、　あかし暮して
ゆくみちに、　日も暮はてゝ
津のくにや、　須磨の浦近く
なりにけり、　かすかに見ゆる
ともし火の、　影のあたりに
たどり來て、　おとなふ聲に
いらへして、　迎ふるひとは
これもまた、　世をうち捨つ
やまでらに、　きよき月日や
送るらん、　むかしながらの
あまならじ、　その故あらば
知らまほし、　聞かしめ給へと
問はるれば、　露にしほるゝ
女郎花、　ちからなげにぞ
見えにける、　こほるゝなみだ
おしぬぐひ、　答へけるやう
ふたとせの、　むかしと今は
ありにけり、　平のやから
おとろへて、　榮えのはなも
ちりはてつ、　月のひかりも
かくれゆく、　八しまの海に
しづみけり、　なつかしき子も
我がつまも、　あづまの夷に
うたれても、　はかなき人と
ありにけり、　木末はなれし
つたかづら、　かゝる方なき
身のうへの、　生き長らふは
本意ならず、　夫子とゝもに
うなばらの、　藻屑となるぞ
のぞましき、　さはさりながら
われなくば、　たれか夫子の
あと弔はんと、　ひとりこゝろに
おもひたち、　惜しからぬ身を
ながらへて、　ぼだいを弔こそ
かなしけれ、　今はなにをか
かくすべき、　すぎこし方を
かたらなん、　平のやからに
中納言、　知盛卿と
きこえしは、　わが夫なりけり
わが子をば、　知章とぞ
なづけゝる、　やから諸とも
こゝのへの、　みやこの空を

たちいでゝ、八重の汐路の
うきなやみ、うきつ沈みつ
さだめなき、身となり果ぬ
なつかしき、夫子もいまや
うたかたの、水のあはとも
消ゆるらん、千ひろの海に
しづみても、底のもくづと
なるらんと、ふかく思へば
ひとりのみ、居らるべしやは
われもまた、まだ空さむき
はつはるに、花のみやこを
たちさりて、ならはぬ旅に
いでにけり、まだ風さむみ
みづぐるま、みな瀬に響く
よどがはの、みぎはの葦に
しも見えて、わづかに匂ふ
あさ日かげ、かゝる山崎
うちこえて、我住みなれし

ふるさとを、後に見なして
ゆくみちを、いそぐのも倘
あつかしき、夫子にあはん
こゝろなり、世のなる果と
云ひながら、先きの榮華に
ひきかへて、つゆ霜しげき
くさぞろも、なれぬ宿りに
かりねして、夢のうき世は
よしあしも、分けぞかねぬる
なには江の、葦の葉わけの
風の音の、身にしむ夜半に
つきかげの、宿るもさよき
こやのいけの、波うつきはを
過ぎ行けば、明ぬとつぐる
とほやまの、鐘のひゞきも
なる尾がた、よするしら波
たちかへり、かはる日數も
重なりて、一の谷へぞ

つきにける、女子を陣に
ゆるさねば、姿をやつし
しのび入り、夫とわが子に
まのあたり、見えしときぞ
うれしかりける、
わが夫の、語り給はく
源と、平のやから
勝負の、けじめのいくさ
明日かとよ、いざや我子よ
きゝねかし、久しきむかし
わがやから、奇しきいさほし
たてしより、一門さかえを
きはめけり、凡そさかえて
衰ろふをぞ、世のことわりと
きゝはべる、あはれ悲しきかも
いづの海や、沖の小島に
立つと見し、あだ波たかく
打ちかはり、東のものゝふ

雲のごとく、かすみの如く
うちなびき、わが一門にぞ
うちよせぬ、いきほひ猛き
あだなみの、よせつ返しつ
あまたゝび、止まざりければ
岩がねの、動かなき世も
みだれそめ、平のやから
あまたゝび、せめたゝかふも
ひさかたの、雲にそびゆる
たかきやの、崩るゝときに
ひともとの、はしらのいかで
さゝゆべき、さればたゝかひ
勝たずして、のずえの草に
おくつゆと、消えかゝらんも
ものゝふの、常とこそきけ
いさほなく、空しく果てんぞ
くちおしき、されば我子よ
よきあだと、取組みてこそ

果つべけれ、めゝしき名をな
ながしぞと、云ひも終らず
わが妻よ、味方もろ共に
うなばらの、底にしづまば、
遇ひ見んも、今宵限りと
知りねかし、はや夜も更ぬ、
ひたゝれや、よろひ兜も
取り出しね、はやとく／＼と
いそげども、はる／＼訪來て
つまと子に、明日や別れん
今日かぎり、また遇ふ事も
なみふかく、怨みを殘して
消ゆるかと、思ひまはせば
はらわたも、千々に碎くる
こゝちして、いそぎかねても
とり出しぬ、着飾るさまの
いさましく、やたけに早る
みこゝろを、見るにつけても

せきあへぬ、なみだに袖を
しぼりつゝ、一樹のもとに
やどをとり、おなじ流れを
汲むほども、先きの世からの
ちぎりぞと、人は云ふとぞ
もろともに、あまたの月日を
過ぎし身の、今宵かぎりの
わかれかと、思ふこゝろぞ
いたはしと、消え入る計り
なげきけり、まだ夜深しと
ものゝふは、はかなき夢を
むすびつゝ、しばしまどろむ
たかいびき、靜けき夜半は
きこえけり、裝ほひすれば
わがつまは、子をはげましつ
ゆみ矢とり、いさほをたてゝ
たとへ身は、露と消ゆるも
我が名をば、よろづよまでも

のこさんと、　いさみ立ちける
程こそあれ、　うらのやま／＼
ありひゞき、　もゝいかづちの
おちしごと、　くづるゝ計りに
きこゆれば、　敵こそ來つれと
うちさはぎ、　あはてふためく
ものゝふは、　取るべきものも
取りあへず、　我おくれじと
走せ出でぬ、　われも城をば
のがれ出で、　行く道すがら
かへり見て、　わが夫いかに
わが子はと、　たゆとふ内に
ながむれば、　夜あらし高く
火おこりて、　とくもえ移る
棟と棟、　暫しのひまに
一の谷の、　城は火の穗と
なりにけり、　またも夫子を
おもひ出で、　倘おしまるゝ
わかれ路の、　悲しきこゝろの
かはらねば、　はる／＼送りし
かひなかりけり。

第二回　須磨の浦

うつりゆく、　末さだめなき
世のなかの、　さまやあはれと
かこちつゝ、　空うちあほぎ
地にふして、　昔しを問へど
かひもなく、　空しくかへる
須磨のうら波。
うつゝとも、　夢とも分かず
立ちさはぐ、　平のやから
磯に下り、　つなげる舟の
ともづなを、　とく間遲しと
こぎいでゝ、　沖つ波路に
むかふあり、　のり入る人の
かずしげく、　波間にしづむ
ふねもあり、　あるはおくれて
きしに立ち、　かへらぬ舟を
まねきけり、　夜風はげしく
ふきあれて、　逆卷く火の穗に
ひさかたの、　空もゝゆべき
いろ見えて、　凄まじき樣を
あとにおし、　よせくる敵の
ひと馬の、　音をきゝつゝ
下り立ちて、　波路わたらん
ふねもなく、　波うつきはに
たちよりて、　佇むひとぞ
あはれなりける。
むらちどり、　波路の末に
鳴くこえも、　あはれをそふる
あけがたに、　ほの／＼見ゆる
山といふ、　山のみね／＼
しらはたの、　なびかぬくまも
なかりけり、　見ゆる限りは

谷といふ、谷間〳〵に
人馬の、音ものすごく
きこえけり、八重の汐路に
帆をあげて、うき世の波路を
かこちつゝ、なみに從がひ
風にまかせ、浮びいでしは
わがやから、御坐舟をば
さきだてゝ、候ふひとの
舟なりけり、城をのがれつ
磯にいで、明けゆく空に
むちあげて、濱路づたひに
落ちたまふ、風にまたゝく
ともし火の、かげ計りなる
わが世とて、なげきし事は
ゆめならで、常なきかぜに
わが身さへ、やがてはかなく
なりはてんも、白なみさわぐ
沖のふねを、うち見やりてぞ
いそぎける、消えゆく末も
つゆ知らず、しのゝめの空
あけそめて、鵯ごえの
あけがらす、高ねのもりに
なきたちて、さだめなき世の
さま見せて、姿かはり行く
よこぐもの、おくにきこゆる
かねの音も、明けぬとひゞく
頃なりけり、いそげば何時か
みなと河、武庫の泊りも
うち過ぎて、草おひしげる
ふく原に、ありし昔を
しのぶにも、傾ふく日かげは
かへりしが、須磨の山ざと
たちはなれ、渚によする
かたをあみ、かへすかたなき
衰運を、なげきしひまに
おくれけん、のりおくれしか
うち惜しや、いかにひと〳〵
ふねよせて、乘らしめ給へ
それがしは、平のやからに
はべるとて、扇をあげて
呼びにけり、折からふきたつ
浦かぜを、しら帆にうけて
ゆくふねの、かへるべしとも
見えなくに、暫し手綱を
引きとゞめ、みぎは近くも
立ちよりて、沖をはるかに
うちながめ、今はやからに
たちおくれ、のがれがたなき
ひさかたの、空をながめつ
籠のとりの、雲をこひしと
見るがごと、あらしの風に
むら千どり、ふき分けられつ
立ちまよひ、友おつかしと
よぶがごと、ものゝふ三人

たゝずみぬ、　くろ毛の駒に
うちのりて、　くろ地錦の
ひたゝれに、　しら糸威しの
よろひを着て、　鍬形うてる
かぶとをつけ、　高く立てたる
わかはたの、　ひるがへるこそ
いさましけれ、　こは父ならん
かたはらに、　駒うちよせて
かたらふは、　たれにやあらん
その子かも、　うき織ものゝ
したゝれに、　紫威しの
兒よろひ、　未だ若木の
山ざくら、　花さかぬ間に
うもれ木と、　朽ちはつべしとは
知らまゆみ、　引てかへらぬ
ことながら、　思ひかへすぞ
ぜひもなき、　ふたり何をか
かたりけん、　駒立て直し

むちをあげ、　西に向ふて
いそぎけり、　ほどなく渡す
かるも河、　かりの命を
長らうも、　あがく治まる
君が代を、　むかしに返さん
こゝろなり、　こまのはやしの
朝かぜに、　いなゝく駒の
こゑたかく、　波よる方を
ながむれば、　須磨の浦にと
つきにけり、　舟やいづこと
見るうちに、　遠く聞ゆる
聲すなり、　近づくまゝに
さやかにも、　それに渡らせ
さふらふは、　平の族に
かくれあき、　大將とぞ
見たてまつる、　いざやかへせと
呼ぶこゑに、　今は何をか
たゆたはん、　駒ひきかへし

中納言、　敵をめがけて
走せにけり、　從がふつはもの
弓を張り、　一人の敵を
射てけるが、　殘れる二人
太刀かざし、　打かゝりければ
知盛も、　打ち合ふ刃
かげさむく、　匂ひそめたる
朝つく日、　光りもきよき
うらなみの、　よせて碎くる
玉の緒の、　絶えなば絶えん
時までもと、　防ぎたゝかふ
程こそあれ、　敵と敵との
間に入り、　あな危しと
見えにけり、　暫しおくれて
知章、　父うたせじと
かけへだて、　つひに敵をば
組みしきて、　そが首をば
かきとりぬ、　父上落のび

給へかし、見わたす限り
野にやまに、雲かすみとも
立ならぶ、敵のいくさぞ
ひとおほき、かけよる敵の
こみ入らば、逐に空しく
討れなん、はや御座船に
ちかづきて、君を守らせ
たまへとて、すゝむる言葉に
知盛は、一むち駒に
加へしが、またも手綱を
ひきとゞめ、わが子を敵に
渡しつゝ、いかでこゝをば
のがるべき、共に討たれて
果つべしと、暫し磯邊に
たゆたへば、とく落ち玉へ
やよ父と、呼るゝこゑに
さてはとよ、こゝろにかゝる
沖つなみ、消えてまほしく
思へども、君やいかにと
ながめつゝ、かへらぬ波に
こま入れて、舟をさしてぞ
のびたまふ、さすがにたけき
ますら男も、子故に心や
まよひけん、見すてかねたる
わが子をば、千たびもゝたび
かへり見て、今やあだびと
うちよせん、何時かはなく
討たれんと、思ひ殘して
出でたまふ、心の内こそ
あはれなれ、ふみとゞまりて
知章、いといさましく
すゝみいり、あだをかずかず
打とりつ、火花をちらして
たゝかひぬ、刃も折れて
ちからつき、敵にうたれて
うせにけり、これぞ我子の
はてなりき、はてしむくろに
ありきてふ、殘せるふみは
これぞかし、されバたびゞと
十六の、春としなれど
花咲かぬ、つぼみのまゝに
わかさくら、嵐のもとに
ちりはてゝ、老木にさきだち
枯れはてし、心はいかに
けなげならずや。

第三回　波路

ふるさとに、ふたゝび歸る
よしなしと、波路のうへに
うきねして、覺つかなくも
見るゆめに、ありし昔しを
しのびつゝ、ゆくえも知らぬ
白なみに、白帆をあげて
ふくかぜに、任せはてたる

ちひろの海原。
あはじしま、　かよふ千鳥と
詠じけん、　むかし寝覺し
せきもりは、　のどけき夢や
結びけん、　いまは汐路の
梶まくら、　舟人となる
身のはてをば、　なげきあかしつ
よもすがら、　夢も結ばで
あかつきの、　千鳥のこえを
聞くときは、　かなしかりけん
あらいそや、　波路陸地も
はる〲と、　見えこそ渡れ
たかさごや、　尾のへの松に
ゐるたづの、　千代の羽風は
ふきかへて、　あだの旗のみ
うちなびき、　平のやから
ほろびゆく、　あはれ悲しきかも
さかえにし、　花の都こに
としを經て、　月雪花に
あこがれし、　昔のさまに
ひきかへて、　うき事つもる
舟のうちに、　明日知らぬ身を
かこちつゝ、　ともに袖をや
しぼりけん、　帆かげさびしく
見えにけるかな。
知盛は、　船のほとりに
駒をよせ、　身はのりうつり
助かりぬ、　やがて手綱を
きりはなち、　暫し駒をば
うちまもり、　汝もともにと
思へども、　ところ狭きこそ
ぜひなけれ、　忠につかへし
汝がこゝろ、　世にある限り
わすれまじ、　波路にありて
いかにせん、　生きながらへん
すべもなし、　とくかへりねと
云ひはてゝ　なみだながらに
むちうてば、　駒はかしらを
立てなほし、　陸地をさして
泳ぎ出でぬ、　舟にありける
人みなも、　あはれと云ひつ
見るほどに、　駒は磯邊に
立ちあがり、　沖をはるかに
かへり見て、　波路ふきこす
あさかぜに、　いなゝく聲の
さやかにも、　舟のうちまで
聞こえけり、　駒もこゝろの
ありけりと、　人々あはれを
もよほしぬ、　やがて知盛
いひけらく、　あはれひと〲
きゝねかし、　舟をもとめて
乗らばやと、　磯に下りたつ
あさぼらけ、　あだに討れて
はつべきを、　武さしの守に（知章）

へだてられ、　からく逃れて
落ちのびぬ、　やけのゝ原に
なくきゞす、　子故に身をも
こがすとぞ、　ねぐらにとまる
あしたづも、　子故のやみに
まよふとぞ、　子を愛くしむ
こゝろねは、　鳥だにかくこそ
あるべけれ、　況してやひとの
こゝろをや、　親にかはりて
はつる子を、　見る〱敵に
わたしても、　つれなくすてゝ
のがれぬと、　人は云ふらん
さりながら、　今うたるべき
身ならじと、　君をおもへば
わが子だに、　數ならじとて
思ひすて、　駒打ち入れしが
わが子をば、　見かへる毎に
やゑばもて、　胸を刺さるゝ
こゝちせり、　いかなる親は
子をすてゝ、　逃るゝらじと
云ひをはり、　瀑なすなみだに
ものゝふの、　よろひの袖ぞ
ぬれにける、　聞くひとみなも
憐はれとて、　聲をおしまず
なげきけり、　寶にや倒るゝ
たかどのを、　ひともと柱は
さゝへ得ず、　平のやから
あはれにも、　あほうな原の
そこふかく、　ふかき哀れを
のこしても、　もくづとこそは
朽ちにけるかな。
子はいかに、　夫やいかにと
よもすから、　磯のとま屋に
かりねして、　おぼつかなくも
ゆめにのみ、　遇ひ見る姿を
うつゝにて、　見るよしもなき
かなしさに、　かたみとだにも
まよひつゝ、　日ねもす磯に
下りたちて、　ゆきこふ人に
こと問ひつ、　八重の汐かぜ
こゝろあらば、　便りせよとて
まちくらし、　かへるかりがね
たまづさを、　はやくつてよと
まち明かす、　月もうつりて
日もかはり、　波路にはてし
わがつまと、　須广の浦にて
よるなみの、　あわと消えにし
わが子との、　ゆくえの程を
知りてけり、　ひとめもたえし
やまに入り、　己がこゝろに
まかせても、　音をばなかんと
はるかにも、　世をばへだつる
山よ入り、　今やわが身は
うきことも、　見ぬめの浦に

すみかへて、世を忘れ貝
ひろひても、安き月日を
送るてふ、あまになりにし
こゝちして、望みは絶えて
あらし吹く、松の木の間の
ふるてらに、石碑たてゝ
夫と子の、跡弔らはん
こゝろなり、明けぬとすれは
看經に、日をば暮しつ
くれぬれば、窓さしこめて
ともし火の、ひかりもよそに
知られねば、世にすてられつ
世を棄てつ、木のした道に
こけふみて、み墓に花を
手向けつゝ、こゝろは高く
そらだきの、けふりの末に
おもひなし、ながき月日を
おくらなん、されば旅びと
やまてらに、我世をすてし
ことわけの、そのあらましは
かくありけり。

新春來復、亦讀者と紙上に見ゆるを得、余の光榮之に過ぐるものなし、先づ諸君の、淸適加年を祝せんと欲す。

我國新躰詩の隆盛思ふに遠かるまじ、余は之を信じて疑はず、されど如何なる詩躰と句調を有するもの出づべきやは、もとより知る所にあらず、只各人好む所の躰調を用ひて作らば適種生存の理り、最も我國語に適當せるもの榮えんは、今更余の云ふまでもなし、余未だ淺學詩歌の事杯知るものにあらず、されど一片の奇好心は遂に余をして此(知盛卿)を起草せしめたり、自ら知らず、歌なるや、詩なるや、將たまた文章なるやを、只是徒らに七五の句調を亂用して文字を並べしのみ。

余が此篇をなす、實に一夕の間を費せるのみ、嘗て世事百忙の内にあり、加ふるに身病む、引照せんに書物なく、考思錬磨せんに時なし、僅に源平盛衰記、日本外史、謠文數曲、歌書數部を引照せしのみ、趣向の新らしきなく、句調舊套を脱せず、未だ心を得ざる所多し、されど讀者もし一夕の作として笑覽し玉はゞ余の本懐とする所、

雲峯誌。

第二年生

通信女學

新募集

問　一年の計事は春に在りと云ひ升、此の一年は如何しましやうか。

答　何よりも先づ少し學問を爲さつては如何です。

問　學問は勿論したいのですが、此齢では學校にも參られませず、獨りでは稽古も出來ませぬゆえ當惑致し升。

答　ナンノあなた、夫には至極よい手立があり升。

問　學校にも行かず、敎師もなくて、學問が出來升乎。

答　其の手立は唯一の、通信女學を御覽なさるのです家の用事を爲ながら、獨りで稽古が出來ます、一年御奮發なさつたら立派な學者にお成なさりますよ。

今年學びずして來年ありと言ふと勿れ、今日學びずして明年ありと言ふと勿れ。　過る一年は夢の如し來る一年いざ勉强せん。　人生れて學者なし若し學ばゞ何人も學者となる。　萬物の靈たるは智慧あるに由る智慧は學問なき人に宿るとなし。　機會は額に毛ありて後ろには無き頭の如し、一と度び前を過ぎしむれば復た捉らへ難し、決心は今日、今日に在。

學問隆盛の今日、女學の進歩一と方ならず、凡そ年頃の娘君にして奮發學に就かぬは最と〳〵少なく、既に一家の妻となりし方にても晩學の勉强をさ〳〵年少の人に劣らぬも多し、概して何處の婦女子も皆な學問と云ふとに心掛け凡そ此心掛なきものは當今の女德に欠けしやう思ふに至りぬると明治の代の恩澤にて有がたきとと云ふべし、因りて何處にも女學校の設けあり何處の娘君も玆に入學して日々の進歩目覺しきとあるが、既に妻となり母となりて一家子女の掛念ある方々は最早家を出て通學するとも出來ず又家に敎師を引て敎を受るも甚はだ手數なれば今日の時世に斯る御婦人のみ此儘無學に終るべきかと心配する人も少なからず、此類の御婦人は何か家に在りて獨り稽古する工夫なきか又獨學に便利の書物はなきかと屢ば問合せあり、吾社之を以て遂に意を決し、昨年一月通信女學の仕組を新設し、毎月一冊の講義録を出版して、四方晩學の婦人居ながら普通の女學を獨り學びするの便に供へたるが、本年一月に至り、一ヶ年の課業を恙がなく卒へて、快ちよく全科を卒業したるもの七百餘名あり。　然るに、去年一月申込の期に後れたる人々も少なからざるを以て、本年更に講義録を再版し、改めて第二回の習讀者を募る。

毎月二百頁以上の講義錄一冊配達、毎日四枚づゝ讀み、一月にて一冊を終へ、一年十二冊を讀了て全科を卒業す。
毎號教授の科目、枚數、及教師左の如し、

科目	一年枚數	一月枚數	教師
萬國史	三五〇	二八	明治女學校教諭 木村祐吉
日本歴史	二〇〇	一六	同 鈴木弘恭
算術	五〇	四	同 磯貝由太郎
簿記	一〇〇	八	同 村木經策
理化學	一〇〇	八	明治女學校教諭 吉田伸子
生理學	一〇〇	八	醫學士 三島通良
動植學	一〇〇	八	農學士 寺尾熊三
作文法文例	一五〇	一二	鈴木弘恭
料理	一〇〇	八	ホイトチー孃
歌詠方	五〇	四	鈴木弘恭
女禮	五〇	四	神谷銀一郎
和文讀本	二五〇	二一	鈴木弘恭
漢文讀本	三〇〇	二四	明治女學校教諭 八木兼辰
家政學 衛生、育兒、看病を合す	二〇〇	一六	醫學士 三島通良
裁縫	一〇〇	八	渡邊辰五郎
圖入地理	一五〇	一二	磯貝由太郎
英學	一〇〇	八	山川　子

右諸科目は何れも獨學に差支なき樣記るし置くと雖ども尚疑はしき條ありて質問を寄する者には各科の教師より夫々鄭寧に應答すべし。

一年にて右諸科目を終る、此丈けを心得れば普通一と通りの女學は學び得たることにて文明なみ〳〵の交際に差支を生ぜず若し此丈けをだに知らねば今後二三年の内に婦人仲間中以上の交はりにも列し難きことあるべし。

女學雜誌は其時々に切要なる女子の心掛を論じ通信女學には永久女子に入用なる學問を教授す其二つ乍ら欠く可らざるは食物と着物の如し、女學雜誌は四季折々の必要を足し通信女學は年中同樣の必用を足す、故に二つを合せ御覽にならば一層に便利あるべし、編者も亦其心掛にて編輯し相合せて錦と花との如く爲さまく祈る。

通信女學一冊前金三十二錢(無郵税)、半年分前金一圓八十錢、一年分前金三圓五十錢、一切前金に非れば發送せず。

明治二十二年一月廿五日第一號を發兌し、以後毎月廿五日に出版して翌一ヶ月中の科目となし、其十二月に至りて全科卒業となす。



女學雑誌

改進の廣告

女學雑誌平素の志望は今更に喋々せじ。其の何如にして生れ出で、又何如にして生ひ立ち、又々何如にして時勢の必要に應ぜしかの經歷は今又事々しく述ぶるヿあるまじ。左れど、女學雑誌は、世に幾多の婦人雑誌ありて夫々の用を爲し各自の長所を發揮する時に於ては、彼等が爲し得べき限りは彼等の爲し得る儘に任せ、女學雑誌は敢て彼等が爲さゞる所ろを爲し、以て少さか女學界の欠典を補わんとせり。之が爲めに、女性に多く讀まるゝヿを求めずと宣言せしこともあり。又止を得ず新聞紙條例の下に立つて多少政論を試みんと布告したることもあり。女學雑誌が希ふ所ろは、婦人雑誌の万能膏たらんヿを欲するにあらずして、其仲間のうちの尤とも爲し難き、需めの尤も狹き、隨て賣高の至て少なき部分を望みて敢爲豪任せんヿを欲するにてありき。一言するに、願わくは婦人雑誌中の改革者、即はち一方に於ける惡まれ者、又婦人雑誌中の先導者、即はち或意味に於ての孤立者とならんヿを覺悟せしにあり。

此精神と覺悟とは今尚ほ勃々たり。恐らくは永遠に斯の如くあらんヿを期望す。左れど、今や他の幾多の婦人雑誌落々として追々に失せ行き、僅かに殘る所ろの三種は、一は佛教を講ずるのみ、一は文章を掲ぐる耳、一は雑駁に只集むる耳なるヿを思ふに於ては、女學雑誌は今や亦た更に一つの責任を負はざるを得ず。加ふるに女學生の半途にて學を休めしものも多く、又新たに女學の必要を説き聞かせねば成らぬ向も多くなれり。

要するに女學雑誌は其一半を割きて其二三年以前の昔しに立反り、即はち嘗て他の婦人雑誌なかりし時の昔し、又嘗て諄々として女學の必要を講述せし時の昔しに反へりて、平易に、且つ手廣に、四方に叫び聞こゆる所なかる可らざるの時節と爲りぬ。故に、女學雑誌は、此際更に一段の改進を爲し、大率ね左の如き條々に於て大ひに變革する所ろあらん。

一 文字を平易にし、事柄を實際にし、尋常の婦人、及び女學に心得なき者にても、能く分るやうに諄々懇ろに説明する事。

二 故に女性の記者八名を新に聘し、家政、其他婦女子百般の心得を實際に説明する事。

三 左れど女學雑誌從前の躰裁を減失し去らんヿを恐れ、毎月一回本紙半分の大附錄を添へ、大問題に對し大議論を爲すべし。

四 故に、平易及び實際となれる毎週の女學雑誌に、此の月一回の大附錄を併せ覽れば、從來女學雑誌の面目は一層煥發すると同時に、實用快樂の記事饒多に增加したるヿを覺ゆべし。

女學雜誌改進大畧

皇帝陛下第一帝國議會を開かせ玉ひ、日本の國勢將に一開變せんとするの初期日たる、十一月廿九日發行の女學雜誌第二百四十一號より、著じるしき改進を爲しぬ。面目新らしく變はり、光彩一きは目立ちたることを自信す。

即はち、欄を、社說、言行、雜錄（集會談話の速記、訪問の記錄、反譯、其他樣々の項目を含む）、家政、小說、兒鑑、批評、文學、理學、笑草、問答、寄書、隨感、時事、新誌、女報、週報、物價、統計、紹介、の二十欄に分ち、從來掲載したる項目の外に、實際の家政經濟取締の件、細君及母親の心得とある覺悟、佳人英雄善者義人などの言行、文學理學などの俗解、物のねだん、病人の取扱方、一切の女の心得向なとを、尤も平易に且つ尤も面白く講述せんとす。

之が爲めに、從前の社員の外に、更に女記者八氏を聘し、各得意の欄に應じて秀妙有益の執筆を請ふべし。中島俊子女史は警扳俊秀の韻文を以て、時事問題を評し、且つ寸鐵殺人の短詩を以て同胞に警告する所あらんとす。若松しづ、田邊花圃の兩女史は、其純潔なる思想又は其才慧ある運筆を以て、各自特得の小說を起草せんとす。女子師範校の卒業生たり、日本女醫の破天光たる荻野吟女史は、衛生、看病の項目を懇ろに講話あらんとす。同じく女子師範校著名の卒業生にして多年理科學を研究し且つ長年之を教授ありける吉田伸子女史は、理學を平易に又樂しみ多く解釋せられんとす。明治女學校速記科第一回卒業生安藤たね子は、四方の有益ある講話會に臨みて、有益なる談話を筆記し、讀者をして坐ながら、諸大家の談話を聽聞せしめんとす。又た、家政學を學術的に講究し、我國に順序立ちたる家政學を創起せんことに熱心し、現に之を研窮し亦常に之を教授せらるゝ所ろの小島きよ女史に請ふて、家政及び兒鑑に信仰あつき最と潔ぎよき說話を掲げんことを欲す。而して、清水豐女史は、專ぱら、編輯の任に當り、全躰の責めを負はんとす。但し、巖本善治が女學雜誌に關係する所ろ敢て今日迄と異なることなし。

女學雜誌は、今後如此く、平易に且つ面白くなるべし、左れば、從來不肖の意見を棄てずして其改革主義の慷慨論あることに愛顧せられたる讀者諸君は、如此き改進を以て或は不滿足と爲し玉ふこともあるべし。吾人も亦之を憾む。故に、月一回の大附錄を添へ、之に於て愚見を十分に吐露し、女學雜誌相應の大議論を公けにすべし。

以後女學雜誌は、殆んど完備したる「家の雜誌」西洋所云るホーム、ジヨウナルとあるべし。而して女學雜誌が愚任したる社會改良的の慷慨意見は、其間に輝々として輝やぎ、每月一回の附錄に於て更に大煥發することあらんとす。其他一層細密なる躰姿何如あらんかは、第二百四十一號以後の雜誌紙面を見て希くは惠評せよ。

要目

女學雜誌　　淸水豐子編輯

右每週各土曜日早朝全國に配布

附錄女學　　磯貝雲峯編輯

右每月第一土曜日女學雜誌附錄

女學雜誌定價元の如し

一冊六錢、郵稅五厘、府內郵稅なし

十冊前金郵稅共六十三錢

附錄女學定價四錢

但し直得意前金拂の讀者に無代呈上

東京下六番町六番地

女學雜誌、通信女學、女學生、發行所

女學雜誌社

女學書類出版所、同じく取次所

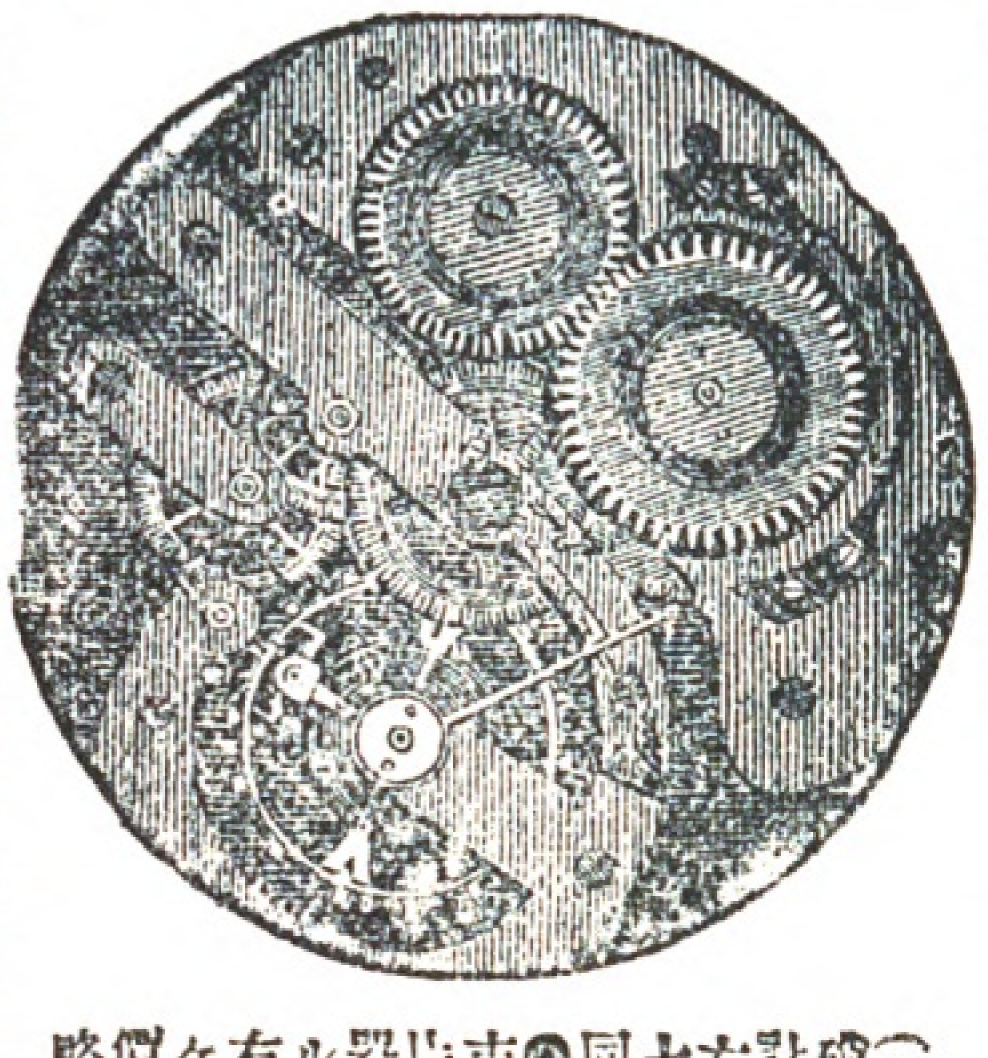
女學生

毎月一回第七號一冊金六錢

編輯人　星野愼之輔

天賞堂時計發賣廣告

瑞西國シイベル、フレンワルド横濱新九十番商會專賣に係る時計の精巧堅牢なるは江湖の熟知せらるゝ處當堂該懷中時計數十種中に就き左の八種を撰擇し廣く之を發賣す



(金側)丁價六十圓十八金廿一形片硝子持出し付金針入龍頭卷懷中時計器械本ニツケル卷上げ臂向ひ爪左アンクル二番より惣石入●丙價七十圓同裏三枚蓋●乙價七十五圓同無雙●甲價九十八圓同裏三枚蓋●各器械構造略圖の如し●東京市外遞送費廿錢●(銀側)丁價八圓片硝子廿一形金針入鍵卷懷中時計器械プラチナ滅金向ひ爪左アンクル●丙價十一圓半同龍頭卷向ひ爪右アンクル●乙價十五圓同本ニツケル卷上ゲ臂二番より惣石入●甲價廿一圓同七所金●各器械構造概略圖の如し●東京市外遞送費廿錢

右時計は器械の堅牢なる當堂が說明を待たざる處なり然れども特に御請求の分に限りて左の手續に從ひ正確の保險狀を呈すべし○保險を要せらるゝ場合は御購求の當時と既に御購求の後に在るとに拘らず各一個に付左の保險料を申受べし　一金側金五圓　一銀側金二圓○保險年限は金銀時計共二十箇年を以て限とす○保險年限中は時に諸器械及び硝子の破損修繕油さし磨き直しの手入は無代價とす○保險年限中自然器械の變化を生じ使用に堪へざる事あれば何時たりとも同種にして新規なる者と交換又は原價を返却すべし●保險の有無に拘はらず**御購求後三十日以內に限り交換又は原價の返戻を要せらるゝときは其望に應ずべし**

今回又左の時計及時計附屬品洋服裝飾品各種を發賣す●但し時計は保險手續其他總て前文による

米國製(金側)十八金廿一形無雙龍頭卷懷中時計甲價百五圓●同乙價九十五圓●同十四金甲價七十三圓●同乙價六十三圓●(銀側)同甲價廿圓●同乙價十六圓●同片硝子價十五圓●(金着側)同無雙甲價廿九圓●同乙價廿五圓

瑞西國製(金側)十八●廿一形無雙懷中時計器械本ニツケル卷上げ臂向ひ爪左アンクル二番より惣石入價六十五圓●同十四金價四十九圓●同十八金裏三枚蓋乙價九十二圓●同甲價百十圓●同七曜及日指し付價百四十五圓●同コロノカラフ引打月の滿缺十二ヶ月七曜及日指し付價三百五十圓●(銀側)廿一形無雙裏三枚蓋金針入龍頭卷懷中時計器械本ニツケル卷上ケ臂向ヒ爪左アンクル惣石爪石入價三十六圓●同片硝子右アンクル價廿九圓●同中硝子價廿六圓●同片硝子鍵卷懷中時計器械本ニツケル卷上ケ臂向ヒ爪左アンクル價十一圓●同惣石入價十五圓●同爪石入價十八圓

貴婦人持時計(金側)十八金十三形無雙龍頭卷懷中時計價廿九圓●同裏三枚蓋價四十五圓●同片硝子價十七圓半●同無雙金剛石裝飾付價六十六圓

時計附屬品　鎖及磁石寫眞入鉛筆其他各種

指環　金黃製見留印付及寶石入各種

洋服裝飾品　腕輪胸飾ピン手ボタン其他各種

交詢雜誌評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は米國製及び夙に時計の製作を以て世に有名なる瑞西國の製品にしてその器械の堅牢なることその構造の精緻なることその裝飾の美麗なること何れも世間の好評に違はざる良品なり尚且購求後三十日以內は購買者の自由に之を取換又は返還するを得て望みに依れば二十箇年を限り之を保險しその年限中は無代價にて之を修復するよしなれば購買者の爲め更に一層の便利なりと云ふべし

東京日日新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て有名なる京橋區尾張町二丁目十八番地の天賞堂にて此程より發賣する金銀時計は歐米製造數千百種の中につき特に器械裝飾の善良完美なるものを撰擇せしものゝ由にて從來舶載の物に比すれば堅牢精緻なる同日の談に非ざるが如し殊に時計一個每に丁寧親切なる心得書を添へ又二十年間の保險を附し購求後三十日以內は物品の交換原價の返却とも購客の望に任ずると云へば自然適意の品物を入手するを得べきなり猶前日來の廣告につき其詳細一覽あるべし

時事新報評

○天賞堂ノ時計　尾張町二丁目ノ天賞堂ニテ發賣スル時計ハ何レモ機械ノ堅牢ナルモノヲ撰ミ購求者ヘ取扱ヒ方心得書ヲモ與ヘ買取後三十日以內ハ交換或ハ原價ノ返却ヲモ求ムレハ其望ミニ應スルトノコトナリ

朝野新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て名ある尾張町二丁目天賞堂にて發賣する時計は各種の時計中に就き特に撰擇せしものにて在來の時計に比し機械も餘ほど堅牢精功なるに一個每に取扱心得書を添へ且購求後三十日以內は都合に依り交換又は原價の返却を求むる時は其望みに應ずる由

郵便報知新聞評

○天賞堂時計　彫刻ニ有名ナル天賞堂(京橋區尾張町二丁目十八番地)ヨリ發賣スル時計ハ米國製或ハ瑞西國製ニシテ器械堅牢且ツ裝飾美麗ナルヲ以テ大ニ評判ヨク殊ニ購求後三十日以內ニ現物ガ氣ニ入ラヌ時ハ他品ト取換ヘ又ハ原價ヲ返戻スルヨシナレハ購客モ大ニ安心シテ買求メ望ミニヨリテハ保險ヲモ附シ其ノ年限內ハ器械及ビ硝子ノ破損等ノ修復ハ無代價ナリト云フ

日本人評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は、歐米各種の製造品中より就き、特に器械の堅牢なるものを撰擇して、一個每に丁寧なる取扱方心得書をも添へ、其上二十年間の保險を附するのみならず、購求後三十日間は、品物の變換、代價の返還をも凡べて其の望み通りに任かすと云へは、購買者に取ては至極便利なりと云ふべし。

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地

天賞堂

女學雜誌

第二百四十七號 明治二十四年一月十日發兌

本號には先のハワイ國總領事安藤太郎氏か禁

禁酒 安藤太郎

酒の説を附錄とし直得意の花客に無代呈上す

下六番町六番地 女學雜誌社